

ISSN 2758-6634

年報 Promis

Vol. 4 (2025) No. 2 (別冊)

シンポジウム

越境・国家・生活世界

インドシナ難民からミャンマー難民までの 50 年

報告書

上水流 久彦 編

目 次

本報告書の刊行にあたって 岡田浩樹	3
シンポジウム記録	6
趣旨説明 上水流久彦	7
第一部	
基調講演 Ken MacLean.....	8
Southeast Asian Refugees in the United States: From Bureaucratic Representations of Them to Cultural Representations by Them	
コメント 今村真央	19
リプライ・質疑応答.....	16
第二部 日本社会に生きるということ 日本社会を超えて生きるということ	
個別事例発表	
落合知子.....	25
ベトナム難民 2 世の定着をめぐって教育と介護の視点から:教育編	
野上恵美.....	28
ベトナム難民 2 世の定着をめぐって教育と介護の視点から:介護編	
乾美紀	30
ラオス難民定住の軌跡—葛藤と楽観性の狭間で	
マキンタヤスティーブン・パトリック	34
国民国家による排除の被害者はどこへ行くのか? ロヒンギャ難民・移民の移 動経路と来日の移動経路と来日経験から考える日本社会のミャンマー難民	
コメント 下條尚志.....	36
リプライ・質疑応答.....	40
発表資料.....	49
あとがき 上水流久彦.....	68

本報告書の刊行にあたって

神戸大学国際文化学研究所

EES 神戸拠点

拠点長 岡田浩樹

本別冊は、2024 年 11 月 24 日（日）に人間文化研究機構グローバル地域研究事業、東ユーラシア研究プロジェクト、神戸大学拠点（略称 EES 神戸）が神戸大学で主催したシンポジウムの基調講演及び発表とそれに関わる議論の内容をまとめた論集です。シンポジウムのタイトルは「越境・国家・生活世界～インドシナ難民からミャンマー難民までの 50 年 Transnationalism, the State, and the Life-World Southeast Asian Refugees in the Last 50 years」であり、基調講演を英語で行っていただいたため、話者の使用言語（日本語もしくは英語）に準じて掲載しています。

まずは、基調講演をされたクラーク大学の Ken MacLean 教授、詳細な個別報告をしていただいた兵庫県立大学の乾美紀教授、一橋大学大学院院生のマキンタヤスティープン・パトリックさん、武庫川女子大学の野上恵美准教授、摂南大学の落合知子准教授、コメントをいただいた山形大学の今村真央教授、神戸大学の下條尚志准教授、問題提起をしてくださった県立広島大学の上水流久彦教授にお礼を申し上げます。また、人間文化研究機構、EES プロジェクト、共催の県立広島大学、神戸大学国際文化学研究推進インスティテュートのサポートがあって実施ができました。関係者の皆さま、そして参加者の皆さまにも感謝申し上げます。

神戸大学拠点は、人間文化研究機構によるネットワーク型基幹研究プロジェクト「グローバル地域研究推進事業」（期間：2022 年～2027 年）として計画された 4 つの地域研究プロジェクト「グローバル地中海地域研究」「環インド洋地域研究」「海域アジア・オセアニア研究」「東ユーラシア研究」（EES 拠点）のひとつを担う研究拠点として神戸大学国際文化学研究推進インスティテュート重点研究部門に設置されました。

この事業はネットワーク型の共同研究として、EES の他の 3 拠点（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、東北大学東北アジア研究センター、国立民族学博物館）と連携し、各拠点がそれぞれのプロジェクトを推進し、組織連携をしつつ、共通テーマの共同研究プロジェクトを推進しています。プロジェクトの目的は、従来の地域研究の枠組みでは捉えられない、現代のグローバル化がもたらす 21 世紀の課題に総合的にアプローチすることです。すなわち、現在、グローバル化は、近代とは異なる空間連鎖や地域連鎖を生成し、グローバル秩序を形成しつつあり、これに伴う新たな課題が顕在化しつつあります。

神戸大学研究拠点では、東ユーラシア地域の中で特に東アジア諸社会における社会変動と、それが域内外に与える諸現象について「少子高齢化とその葛藤」の問題を中心に、総合的かつ包括的な研究を進めています (<https://ees-kobe.com/>)。21 世紀を迎え、東アジ

ア諸社会に共通する問題として、少子高齢化などの人口変動の現象が社会・文化・自然環境など広範で深刻な影響を与えつつあります。日本、韓国、北朝鮮、中国、ロシア、モンゴル、台湾などの諸社会・地域では、グローバリゼーションの影響が強まる中で、少子高齢化、越境と移住労働、トランスボーダーなどの現象が連動、相互浸透、反射し、ミクロレベルからマクロレベルまでの葛藤や社会変化が起きています。このため、神戸大学拠点では、「東アジアの少子高齢化」をコアテーマとしつつも、相互に連動する様々な具体的なテーマに取り組むために5つのグループ（「住まいとライフスタイル」、「身体、感覚と他者性」、「テクノロジーとモビリティの拡張による距離と境界の再構築：空間・身体・イデオロギー」、「なりわいとグローバル経済」、「人口減社会における越境・家族・国家」）を設定し、グループ間連携マネージメントネットワーク（トピックに応じてグループを超えて複数の研究者が取り組む）方式で今日的課題に取り組んでいます。

今回のシンポジウム「越境・国家・生活世界～インドシナ難民からミャンマー難民までの50年」は、「人口減社会における越境・家族・国家」グループの企画です。同時に神戸大学拠点、さらにはEES全体にも広がる大きな課題を取り扱っています。基調講演でKen MacLean教授はインドシナ難民に関する歴史を振り返り、その課題を論じていただき、これを受ける形で個別の事例の報告が行われ、活発な議論が行われました。

インドシナ難民が生まれて50年がたつ現在、母国や受け入れ国の政治的経済的变化や情報機器の発達によって彼らを取り巻く環境は複雑化し、国民国家の枠組みに収斂されない難民の姿も浮かびあがっています。また、ミャンマーでも2021年2月以降政情不安定から多くの難民が生まれています。このシンポジウムでは、インドシナ難民からミャンマー難民までの歴史を振り返ったうえで、多様な姿を見せるインドシナ難民やミャンマー難民の日本で、の姿から、彼らが直面する/してきた困難に向き合い、その乗り越えや格闘、新たな環境への適応に注目し、「国民統合」や「多文化共生」を批判的に検証することを通じて、それらに回収されない社会のあり方を模索しました。

シンポジウムにおける基調講演、発表、コメント、議論を十分にお伝えすることは難しいですが、その場限りの議論に留めるのではなく、2024年度に続き、「人口減社会における越境・家族・国家」グループ企画のシンポジウムを「報告書」の形で広く共有できることを願っております。

昨年度の報告書『シンポジウム「日本を選ぶ（残る）理由、日本を選ばない（去る）理由』（年報 Promis Vol.2（2023）No.2（別冊））でも申し上げましたが、ネットワーク型研究プロジェクトの利点に鑑み、今後のプロジェクトの展開を見据え、今後のテーマの進展をプロジェクトメンバー、さらにはテーマに関心のある研究者と共有し、さらなる深化、拡張、化学反応を期待し、今後の活発な議論をお待ちしています。

国際シンポジウム

「越境・国家・生活世界～インドシナ難民からミャンマー難民までの 50 年」

日時：2024 年 11 月 24 日（日）13:30～17:30

場所：神戸大学/オンライン（ハイブリッド開催）

趣 旨 説 明

上水流 久彦（県立広島大学）

インドシナ難民の発生から約 50 年が経過し、時間的变化によって母国や受け入れ国の政治的・経済的状況は大きく変化している。新世代の誕生、最初に来た方々の高齢化などにより、難民を取り巻く環境は複雑化し、難民という言葉では捉えきれないほどに個別化している。さらに、情報機器の発達により国境を越えたネットワークやコミュニケーションが日常化し、国民国家の枠組みに収斂されない難民の姿も浮かび上がっている。加えて、2021 年以降の政情不安定の中で多くのミャンマー難民が生じており、特にロヒンギャの人たちが面する困難さは深刻である。

そこで今回は、時間軸の変化と空間的拡大に基づく彼らの一枚岩では捉えられない多様な姿にアプローチしようと考えた。彼らの直面する／してきた課題や、それに対する乗り越えや格闘、新たな環境への適応についてデータを踏まえて話をしていきたい。そして、日本で盛んにいわれる多文化共生や国民統合という考え方を改めて考え直し、それらに回収されない社会の在り方を模索できればと考えた。これが本シンポジウムを企画した背景である。

日本は移民を認めていないため、国外から来た方がいつか帰ることを念頭に政策を立て、それが「共生」という言葉で語られている。一方、ドイツやフランスを含めた欧米では、移民として来た人々を「統合」していくという概念がある。一方で、統合であれ共生であれ、そこには「包摂」と「排除」がある。その中でどういう問題が考えられるのか。例えば統合という形の包摂と、共生という形の包摂はどう違うのか、あるいはその違いに対して難民がどう対応しているのか、逆にどのような影響を受けているのか。統合される中で排除される人もいれば、統合される一方で排除されることも起こり得る。これらの問題についても今日の具体的な事例から問うことができると考えており、こうした問題意識のもと今日の発表を聞くことを非常に楽しみにしている。

本日のプログラムは第 1 部と第 2 部に分かれ、第 1 部ではクラーク大学から Ken MacLean さんを迎え、基調講演をいただく。インドシナ難民も含めた歴史に加え、現在アメリカに暮らすベトナム、カンボジア、ミャンマー出身の人たちについて解析度の高い話をさせていただく。

第 2 部では「日本社会に生きるということ 日本社会を越えて生きるということ」というテーマで 4 名の方に発表をお願いした。最初は、摂南大学の落合さんと武庫川女子大学の野上さんから「ベトナム難民 2 世の定着をめぐる」と題して、教育と介護の視点から話を頂戴する。3 人目は兵庫県立大学の乾さんで、「ラオス難民定住の軌跡」と題して主に 1.5 世に焦点を当てた話をして頂く。最後に一橋大学大学院のマキンタヤ スティーブン・パトリックさんからロヒンギャをテーマに「国民国家による排除の被害者はどこへ行くのか？」という題目で話を聞かせて頂く。

第 1 部では山形大学の今村さんに、第 2 部の討論では神戸大学の下條さんにコメントをお願いしている。それを受けてオンライン・会場の皆さんからも意見や質問を頂き、討論したい。17 時半までの長丁場だが、最後までお付き合い願いたい。

第1部 基調講演

Ken MacLean (Clark University)

Southeast Asian Refugees in the United States:

From Bureaucratic Representations of Them to Cultural Representations by Them

I would like to thank all of the event's organizers for the kind invitation to speak today. Before speaking further, I must admit that I do not directly research topics related to the challenges and successes of Southeast Asian refugees in the United States. My area of expertise relates to the types of violence that forced them to flee in the first place. That said, my comments do draw upon my years of informal interactions with them, both before and after resettlement, as well as professionals who provided them with aid. It is my genuine hope that you will find something of interest and use in my presentation today in light of Japan's changing immigration and refugee policies.

The structure of talk of my talk is as follows. First, I will examine how some of the concepts and practices designed to assist Vietnamese, Cambodia, and Burmese refugees in the United States paradoxically makes them hyper-visible, on the one hand, and invisible, on the other. By this I mean the historical emphasis in the United States has focused on integrating these refugees into mainstream society. While integration is important and necessary task, it has also meant that we frequently fail to recognize that refugees are also discrete individuals. Specifically, individuals who have their own wants, needs, as well as the capacity to apply creative solutions to the problems they face in their daily lives.

Second, I argue that close attention to the agency of refugees offers a way to move beyond "the refugee" as an undifferentiated collective identity to one where the exercise of individual choice and action rejects the assumed need for paternalistic protection. Recognizing refugee agency thus means recentering refugee voices and, importantly, truly hearing them. To do so, we must strive to understand how they conceptualize their own life experiences and how they seek to be recognized on their own terms.

Third, to demonstrate my point about recognition, I will feature several examples of refugee cultural expression to highlight the diverse cultural forms it can take. The examples include a Vietnamese American "Boat People" memorial, Khmer American rap music, and paintings by Burmese artists in-exile in the United States. I will then provide some concluding remarks.

Introduction

In *Seeing like a State*, the great, recently deceased political scientist, James Scott, described the three-step process by which modern states seek to govern at a distance. The first is simplification, whereby states replace complex, idiosyncratic, and diverse local practices with nationwide standardized ones. The second is legibility, which consists of recording and reporting formats that generate data, such as statistics, that easily be read and interpreted by technical experts. The third is manipulation, a term he

used in a neutral sense to convey how states attempt to transform the data that is now simplified and legible into a governable “reality,” one that can be managed in desired ways. In other words, to make and to implement policy. Problematically, the three-step process disregards existing local knowledge, local specificities, and local autonomy, creating an iterative cycle. A cycle where the failure to take local contexts and desires into accounts means that “problems” will inevitably arise and prompt new “solutions” that in turn generate new “problems,” and so on. Hence, the subtitle to Scott’s book, *How Certain Schemes to Improve the Human Condition Have Failed*.¹

Why is Scott’s work relevant? At the end of 2023, the UN High Commissioner for Refugees (UNHCR) calculated that there are 37.6 million refugees globally and another 6.9 million seeking asylum.² The degree of need is vast, and the amount of funds available grossly insufficient, which is why UNHCR relies heavily on non-governmental organizations (NGOs) as implementation partners to provide direct assistance. For my purposes today, I want to propose that humanitarian NGOs that serve refugees function in much the same way as states, albeit on a much smaller scale.³ These NGOs are heavily dependent on external funding, much of it provided by states. Consequently, they have to copy the organizational structures, align their programs, and adopt procedures of their funders to receive and then continue to receive money. These pressures frequently create unnecessary competition between NGOs, as well as program duplication, and other types of inefficiencies—all in the name of simplification, legibility, and manipulation.⁴ Close attention to these dynamics helps explain why service providers (e.g., public health experts, case workers, and psychologists) as well as academics reproduce knowledge and adopt practices that reflect the priorities of states, universities, and, of course, funders. In other words, knowledge production about refugees is crucially shaped by their agendas and generally without significant refugee input.

To explain what these dynamics look like in practice, I will now provide some historical context for the Vietnamese, Cambodian, and Burmese refugees who have resettled to the United States, often after having spent many years, and sometimes decades, in camps in Thailand.

Historical Frames

The arrival of Southeast Asian refugees to the United States began almost 50 years ago, and it remains the largest group to be resettled to date. The civil war in Vietnam, the secret bombing of Laos, and the genocide in Cambodia helped produce very large refugee flows. However, these conflicts must also be seen in their historical context, one where anti-colonial struggles and Cold War geopolitics help create the conditions of possibility for decades of cataclysmic violence. This violence claimed millions of lives. Many countries bear partial responsibility for this destruction: France, China, the Soviet Union, and

¹ James Scott, *Seeing like a State: How Certain Schemes to Improve the Human Condition Have Failed* (New Haven: Yale University Press, 2020).

² UNCHR, “Refugee Data Finder,” <https://www.unhcr.org/refugee-statistics/>.

³ Michel Trouillot, “The Anthropology of the State in the Age of Globalization: Close Encounters of the Deceptive Kind,” *Current Anthropology* 42, no. 1 (2001): 126.

⁴ Alexander Cooly and Ron James, “The NGO Scramble: Organizational Insecurity and the Political Economy of Transnational Action,” *International security* 27, no. 1 (2002): 5-39.

others—but none more so than the United States.

As part of its long war against communism, the United States worked directly and indirectly with millions of Southeast Asians. The United States provided massive financial support, technical training, and military assistance to Vietnam, Cambodia, and Laos over the course of decades. The United States did so in Thailand as well. The overarching purpose was to dictate its desired political outcomes framed in terms of the Domino Theory, which postulated that the collapse of one government to communism in Southeast Asia would lead to the fall of all others.

Ultimately, communist-led insurgencies did succeed—first in Cambodia, Vietnam soon thereafter, and then Laos. Hundreds of thousands of people, primarily political, military, and economic elites and their families sought immediate refuge with the United States. Despite official promises, the United States evacuated a very limited number of these individuals, leaving the vast majority behind to face well-founded fears of persecution, including execution. Hundreds of thousands of these individuals later fled in the 1980s and early 1990s: Vietnamese in boats traversed the South China Sea, Cambodians walked to the Thai border, and Lao and Hmong secretly floated themselves at night across the Mekong River to Thailand. All told, an estimated 1.1 million people from these three countries were eventually resettled to the United States, almost always after extended periods of detention in refugee camps.

The United States lacked a unified national system for managing the resettlement of Southeast Asian refugees when they first began to arrive in 1975. In other words, the State could not yet see “refugees” beyond conceptualizing them as having the same needs irrespective of their country’s histories of conflict as well as diverse cultural beliefs and practices. For example, the Indochinese Resettlement Assistance Act, quickly passed in May 1975, one month after the communist victories, assumed that the regional crisis would end within two years. As the Southeast Asia Resource Council (SEARC) has noted, resettlement was at the time conducted by the US State Department on an *ad hoc* basis and relied heavily on voluntary organizations, many of them faith-based religious ones. Consequently, the refugee communities that emerged in the US were initially small, spatially scattered, and in areas where there was insufficient infrastructure to support them in the form of social services, housing, and, of course, the culturally sensitive approaches to address the trauma of war and displacement. Instead, they were treated much like regular migrants with the neoliberal expectation that they would become economically self-sufficient within only a matter of months and then thrive with little to no further assistance.⁵

The Southeast Asia Resource Council was a driving force behind the passage of the 1980 United States Refugee Resettlement Act. The resettlement act had three main goals. First, to increase the resettlement of Southeast Asians who remained in refugee camps across the region. Second, to create an Office of Refugee Resettlement to build the infrastructure needed to support them upon and after arrival in the United States. Third, to establish “mutual assistance associations” to help communities receiving refugees to better understand their diverse needs.⁶ These associations received federal

⁵ Southeast Asian Resource Council, *Southeast Asian American Journeys* (Los Angeles: Asian Americans Advancing Justice, 2022), 5.

⁶ See also, Rubén G Rumbaut, “The structure of refuge: Southeast Asian refugees in the United States, 1975-1985,” *International Review of Comparative Public Policy* 1 (1989): 97-129.

government funding, especially to address the cultural and language needs of their specific refugee communities. Despite these efforts, many of the refugee communities encountered significant difficulties: racism, hostility, and warehousing in areas with high rates of unemployment and crime, as well as poor housing and schools.⁷ Persistent inequities exist today. However, the situation is much improved for most.⁸

The history regarding refugees from Burma, now known as Myanmar, is similar to and different from the those discussed thus far. The country obtained its independence from Great Britain in 1948. Ethnic conflict began also immediately where various groups have fought either for independence or regional autonomy for more than 70 years. Conflict-induced migration displaced hundreds of thousands of people internally. But it was only in 1984 that the first major outflows of ethnic Karen into western Thailand occurred. Many people who had been long involved in providing services to Cambodian refugees on the eastern border relocated to the Thailand-Myanmar to provide emergency assistance. And as is often the case in protracted refugee emergencies, defined as those lasting five years or more, a whole ecosystem of humanitarian NGOs took shape to provide food, shelter, hygiene, education, and so on. Due to ongoing fighting, especially in Karen areas in southeastern Myanmar, the number of UNHCR registered refugees in the 9 “temporary” camps, as the Thai government refers to them, grew to nearly 120,000 people.⁹ As of December 2023, nearly 91,000 remain in these camps.¹⁰ Resettlement to the US only began in 2007 when 9,776 people arrived. Since then, more than 12,000 per year have been resettled, again most of them Karen, and they live in dispersed communities around the country.¹¹ The current civil war may prompt much larger flows in the near future.

Historically, UNHCR promoted three durable solutions for refugees: voluntary repatriation, local integration, and resettlement to a third country. In recent decades, a fourth *de facto* approach has emerged: warehousing. Warehousing “is the practice of keeping refugees in protracted situations of restricted mobility, enforced idleness, and dependency – their lives on indefinite hold – in violation of their basic rights under the 1951 UN Refugee Convention.”¹² Systematic restrictions on the right to the freedom of movement, which frequently amount to confinement without end, is a defining feature of warehousing. Simply, the practice forces refugees to remain in camps for extended periods of time

⁷ For further discussion, see W. Courtland Robinson, “The Comprehensive Plan of Action for Indochinese Refugees, 1989-1997: Sharing the Burden and Passing the Buck,” *Journal of Refugee Studies* 17, no. 3 (2004): 319-333.

⁸ See, e.g., Donald Kerwin, “The US Refugee Resettlement Program-A Return to First Principles: How refugees Help to Define, Strengthen, and Revitalize the United States,” *Journal on Migration and Human Security* 6 no. 3 (2018): 205-225; Stacy Kula, and Susan J. Paik. “A Historical Analysis of Southeast Asian Refugee Communities,” *Journal of Southeast Asian American Education & Advancement* 11, no. 1 (2016): 1-27.

⁹ For current figures, see UNHCR, “Thailand Fact Sheet” (30 June 2023). Thailand has yet to ratify the refugee convention or its protocols, hence, the strategic word choice. For broader discussion, see, Sébastien Moretti, “Southeast Asia and the 1951 Convention relating to the Status of Refugees: Substance without Form?” *International Journal of Refugee Law* 33, no. 2 (33): 214-237.

¹⁰ UNHCR, “Thailand – Operational Fact Sheet,” 31 December 2023.

¹¹ Songkyu Lee, Jennifer Cornwell, Sunha Choi, and Laural Proulx, “Community Integration of Burmese Refugees in the United States,” *Asian American Journal of Psychology* 6, no. 4 (2015): 333.

¹² Merrill Smith, “Warehousing Refugees: A Denial of Rights, a Waste of Humanity,” *World Refugee Survey* 38, no. 1 (2004): 38.

without hope of resolution. Vietnamese, Cambodian, Laotian, Hmong, and Burmese refugees all endured warehousing before resettlement to the United States and elsewhere. For refugees who spent many years in the camps, including those born in them, they face many of the same problems regardless of conflict origin—namely, a culture of dependency, limited educational opportunities, and few relevant vocational skills. The desire to integrate refugees into mainstream society upon resettlement is thus a key concern.

Framing Integration

As I mentioned at the outset, non-governmental actors also sought to “see” Southeast Asian refugees in a manner not unlike States. These actors include not only academics and direct service providers, but also local government agencies, policymakers, and foundations whose respective political and financial priorities can and often do change significantly with little notice. All too often these changes occur irrespective of what different refugee populations want and need. On the one hand, efforts to simplify, make legible, and manage refugees in standardized ways is perfectly understandable. There are over 2.5 million Southeast Asians, refugees and their descendants, living in the United States today.¹³ These people did then and still do today require significant support. Designing that support requires specific types of knowledge about them, which mainstream integration approaches can provide.

For this reason, much of the academic and practitioner research literature on Southeast Asian refugees can broadly be grouped under the heading of community integration, which is a type of assimilation by another name. How is the presence and absence of community integration measured? Most approaches seek to assess at least four elements, both within the group and in relation with other groups. For example:

1. Socio-demographic characteristics (e.g., age, sex, educational attainment, income);
2. Clinical diagnoses (e.g., health conditions and psychological problems, including trauma);
3. Immigration status under United States law; and
4. Nature of relationships (e.g., physical proximity, frequency of social interactions, and psychological evaluations of a sense of belonging).¹⁴

But these efforts, however well-intentioned, are also problematic in numerous ways. First, the category of “Southeast Asian refugee” is a misnomer even though they all had to flee their countries as a result of violent conflict and subsequent government persecution. So, some of their experiences may overlap. But they are still not the same due to important differences between Vietnamese, Cambodian, and

¹³ Ngoan Le, “The Case of the Southeast Asian Refugees: Policy for a Community “at-Risk,” www.aasc.ucla.edu (2020), 171; Eugenia Hsu, Corrie A. Davies, and David J. Hansen, “Understanding Mental Health Needs of Southeast Asian Refugees: Historical, Cultural, and Contextual Challenges,” *Clinical Psychology Review* 24, no. 2 (2004): 193-213.

¹⁴ Lee, Choi, Proulx, and Cornell (2015): 335-336.

Myanmar refugees, as well as subgroups within each country group.

Second, while many of these refugees have succeeded along various metrics, socio-economic insecurity is still quite high. Large numbers of them, for example, live under or close to the poverty line.¹⁵ Third, English-language proficiency is still limited: Vietnam (65%), Laos (62%), and Cambodia (59%) and now Myanmar, the newest group (71%). Fourth, low-levels of educational attainment are an issue as well. Nearly 30% of Southeast Asia refugees have not completed high school or the general equivalency exam.¹⁶

Additionally, efforts to see and thus know and thereafter assist refugees (be they Southeast Asian or other populations) overwhelmingly fail to incorporate the experiences of refugees as socio-political and cultural actors in their own right. Consequently, as Mike Frangos and Sheila Ghose point out, “refugees are institutionally silenced, depoliticized, and dehistoricized.”¹⁷ We should instead, they continue, focus more attention on who and what produced them as refugees in the first place. In the case of Southeast Asia, the United States bears the greatest responsibility. Its interference in decolonization efforts, revolutions, and civil wars in the name of anti-communism produced more than 3 million refugees, of which 1.4 million were eventually resettled in America.¹⁸ All of this means that the United States government bears special responsibility for assisting these refugees, but also in ways they themselves want and need.

Peter Gatrell uses the concept of “refugeedom” to address this shortcoming.¹⁹ According to Gatrell, respect for “refugeedom” requires us to examine how refugees “adopt, occupy, articulate, internalize, and in some cases resist” the policies and practices of government officials and aid workers.²⁰ That is, we should not see all refugees as passive victims in constant need of paternalistic attention. Adopting the “refugeedom” approach, he further argues, enables us to move beyond “the refugee” as an undifferentiated collective identity to an intersectional one. By intersection I mean developing an understanding of how people’s overlapping identities and experiences shape the complexity of prejudices they face and privileges they enjoy. Racial and ethnic differences matter. So, too, do religious,

¹⁵ Arthur Sakamoto, John Iceland, and Thomas Siskar, “The Socio-economic Attainments of Second-generation Southeast Asian Americans in the 21st Century: Evidence from the American Community Survey, 2012-2016,” *Population Research and Policy Review* 41 (2022): 59-88.

¹⁶ Mary Hanna and Jeanne Batalova, “Immigrants from Asia in the United States,” Migration Policy Institute (10 March 2021), <https://www.migrationpolicy.org/article/immigrants-asia-united-states?ref=stanfordreview.org>; SA Facts Team, “AAPI Demographics: Data on Asian American Ethnicities, Geography, Income, and Education,” 25 April 2023, <https://usafacts.org/articles/the-diverse-demographics-of-asian-americans/>

¹⁷ Mike Classon Frangos and Sheila Ghose, “Why Refugee Genres? Refugee Representation and Cultural Form.” In, Frangos and Ghose, eds., *Refugee Genres* (New York: Palgrave and Macmillan, 2022), 5.

¹⁸ Vinh Nguyen, *Lived Refuge Gratitude, Resentment, Resilience* (Berkeley: University of California Press, 2023), 19-20.

¹⁹ Peter Gatrell, “Refugeedom: Making Room in the Crowded Conceptual Terrain,” *Social Research: An International Quarterly* 91, no. 2 (2024): 619; Yen Le Espiritu, Land Duong, Ma Vang, Victor Bascara, Khatharya Um, Lila Sharif, and Nigel Hatton, *Departures: An Introduction to Critical Refugee Studies* (Berkeley: University of California Press, 2022), 22.

²⁰ *Ibid.*, 621.

political, and gendered ones. Taking these intersectional identities and experiences into account enlarges the space for refugees to exercise their agency. Furthermore, recognizing refugee agency thus means recentring refugee voices to understand how they themselves conceptualize their identities and experiences as well as how they seek to be recognized on their own terms.²¹

The Critical Refugees Collective, a group of scholars, almost all of whom were themselves refugees, make a similar point. They assert that there is a pressing need to disrupt the processual narrative, which is structured as follows: first, the refugee crisis, second, the humanitarian rescue, and third, the expectation of the receiving country that the refugees must be eternally grateful for the aid given.²² In the Collective's shared view, it is urgent that we also take into consideration the "imaginative ways that refugees re-create in their stories the formative ideas of community and collective justice." "With the stories they tell and retell," they explain, "refugees instruct us on what it means to be human and humane in the best and worst of times."²³

Representations by and for Southeast Asian Refugees

In the time that remains, I will present three examples that "call attention to the histories and aesthetics of refugee expression beyond the representation of refugees as silent or passive victims."²⁴ Why is this important? As Vinh Nguyen reminds us, Southeast Asian refugee memories offer "counter-memories." They do so by "filling in gaps, challenging official histories, seeking justice, and producing alternative visions."²⁵ The first example concerns the construction and use of Vietnamese American memorials honoring "Boat People." The second summarizes the emergence of Cambodian American rap music to describe Khmer refugee experiences both there (during the genocide) and here (after resettlement). And the third focuses on a prominent Burmese artist in-exile whose paintings provide rich political commentary on the situation in her home country.

Vietnam

Throughout Vietnamese diaspora, Vietnamese-constructed war memorials tend to reflect a hyper-masculine anticommunism and the symbolism of a failed but "just cause." By contrast, memorials to

²¹ Peter Gatrell and et al., "Reckoning with Refugeeedom: Refugee Voices in Modern History," *Social History* 46, no. 1 (2021): 71-72.

²² Yen Le Espiritu and et al. (2022), 77; Vinh Nguyen, *Lived Refuge Gratitude, Resentment, Resilience* (Berkeley: University of California Press, 2023). See also, Makau Mutua, "Savages, Victims, and Saviors: The Metaphor of Human Rights," *Harvard International Law Journal* 42, no. 1 (2001): 201-245; Anne Orford, "The Constitution of the International Community: Colonial Stereotypes and Humanitarian Narratives." In *Reading Humanitarian Interventions: Human Rights and the Use of Forces in International Law* (Cambridge: Cambridge University Press, 2003), 158-185.

²³ Le Espiritu and et al. (2022), 6-7.

²⁴ Frangos and Ghose (2022), 8. See also, Arek Dakessian and Liliana Riga, "Art, Refugeeedom, and the Aesthetic Encounter," *Journal of Ethnic and Migration Studies* 50, no. 12 (2024): 3110-3131.

²⁵ Nguyen (2023), 21.

Boat People, at least 25 exist world-wide, convey three very different messages. First, the commemoration of the thousands of lives lost due to harsh weather, pirate attacks, and unsafe vessels. These memorials often feature plaques with inscriptions, names of the deceased, and symbolic imagery representing the harrowing journey across the South China Sea, or the East China Sea as it is known in Japan. Second, the memorials also celebrate the courage and determination of the survivors who risked everything for the hope of freedom. They often serve as a place of reflection for the Vietnamese diaspora and a reminder of their shared history as a consequence. Third, these memorials are not only for the Vietnamese community, but they also serve to educate the broader public about this tragic chapter in history. Consequently, they typically include information about the historical context, the reasons behind the exodus, and the challenges faced by the Boat People.²⁶

The most prominent Vietnamese Boat People monument in the United States is located in “Little Saigon” in California where very large numbers of refugees and their descendants reside. The memorial is the most prominent one in the U.S. Unveiled in 2009, it depicts a family of three – a father, a mother, and a child – standing on a makeshift boat. The statue's figures are shown looking forward, conveying a sense of hope and determination, even as they face an uncertain future. This arrangement symbolizes both the struggles and the resilience of the Boat People. Behind the sculpture is a wall with inscriptions, including the names of individuals and families who contributed to the monument's construction. It also features a dedication to all who lost their lives during the escape.

The Vietnamese Boat People Monument has since become a significant cultural and historical landmark in Little Saigon. It serves as a focal point for community gatherings, including commemorative events like “Black April,” which marks the fall of Saigon and remembers the lives lost during and after the Vietnam War. The monument thus helps educate future generations about the history and experiences of Vietnamese refugees, fostering a sense of cultural identity and heritage among younger Vietnamese Americans.

Cambodia

Khmer American rap music is a unique genre that blends traditional Cambodian music and cultural elements with modern hip-hop beats and themes. This genre often explores the experiences of Cambodian immigrants and their descendants in the United States, touching on issues such as identity, cultural preservation, and the challenges of living between two worlds.

Four main themes characterize this music. First, culture identity: Many Khmer American rappers use their music to explore their dual identity, reflecting on what it means to be both Cambodian and American. Second, historical and political commentary: Some artists address the traumatic history of Cambodia, including the Khmer Rouge genocide, and its impact on Cambodian communities in the diaspora. Third, social issues, such as gang violence, poverty, and racism are common themes in Khmer American rap, mirroring the broader experiences of many immigrant communities in the United States.

²⁶ Notable memoirs about boat people include Andrew Pham, *Catfish and Mandala: A Two-Wheeled Voyage through the Landscape of Memory of Vietnam*; Kien Nguyen, *The Unwanted: A Memoir of Childhood*; and G.B. Tran, *Vietnamerica: A Family's Journey*.

Fourth, language: Artists often rap in a mixture of English and Khmer, which is appealing to both Cambodian and American audiences.

Approximately 510,000 Khmer went to Thailand and another 100,000 to Vietnam as a result of the genocide. Between 1980-1985, nearly 150,000 of them arrived in the US. They now number around 280,000 people.²⁷ Several cities play host to large numbers of them, especially Long Beach, California, and Lowell, Massachusetts. These cities serve as important locales for both traditional cultural activities (language, dance, religious practice, etc.), but also crucibles for hybrid and new forms of expression. Many Cambodian face significant challenges: racism, xenophobia, gang violence, deportations, racial profiling, economic insecurity, limited job opportunities, high rates of teen pregnancy, and welfare dependency. These experiences, along with the dislocations resulting from the genocide provide “source material” for PraCh Ly, who pioneered the rap genre in the Khmer communities in both the United States and Cambodia.²⁸

PraCh Ly, whose name in Khmer means both “advisor to the king” and one “who talks a lot,” was born in Cambodia during the genocide. He later fled the country and resettled in Long Beach. His music career took off in the early 2000s when he released his debut album, “Dalama: The End'n is Just the Beginn'n” (2000). (Dalama is his neologism for the combination of trauma, drama, and dilemma refugees experience.) He recorded the album in a makeshift studio and featured a mix of English and Khmer lyrics. It gained significant attention in Cambodia and among the Cambodian diaspora, largely due to its raw and honest portrayal of the Cambodian genocide and its aftermath. In fact, his first album became the top-selling one in Cambodia, not only introducing the genre to the country, but also inspiring a new generation of Khmer artists. The album was banned on radio for a time due to its content on the genocide, but the government could not stop it being played at home and in clubs.

Subsequent albums continued to explore themes of history, identity, and social justice. His work often reflects on the impact of the Khmer Rouge regime and the ongoing struggles of Cambodian communities around the world. In doing so, PraCh Ly is an example of a “transnational cultural producer who fuses ‘country of origin’ arts to ‘country of settlement’ aesthetics, yoking ‘over here’ concerns to ‘over there’ problems.”²⁹

Art of FaCt

beyond the killing field,

²⁷ Cathy J. Schlund-Vials, “From the Mekong to the Merrimack and Back: The Transnational Terrains of Cambodian American Rap,” *Global Asian American Popular Cultures*, ed. S. Dave, L. Nishime, & T. Oren (New York: NYU Press, 2016), 114.

²⁸ For background, see: Leakthina Chau-Pech Ollier, “The Rapping (in) the Homeland: Of Gangs, Angka, and the Cambodian Diasporic Identity,” *Expressions of Cambodia: The Politics of Tradition, Identity, and Change* (New York: Routledge, 2006), 117-132; Stephen Mamula, “Starting from Nowhere? Popular Music in Cambodia after the Khmer Rouge,” *Asian Music* 39, no. 1 (2008): 26-41.

²⁹ Cathy J. Schlund-Vials, “Hip-Hop Memoirs: An Interview with American Rapper PraCh Ly,” *MELUS* 36, no. 4 (2011): 160.

a quarter of a century after the genocide.
after 2 million people murdered,
the other 5 million survive.
the fabric of the culture, beauty drips the texture.
i find myself in Long Beach,
the next Cambodian mecca.
beside srox Khmer, whale shrie Angkor Wat,
some people still struggling,
on the aftermath of Pol Pot.
for some futures so bright, looks like high beams,
for others are lost in the American Dream.
for me it seems i'm on the road to no-where fast.
hitting speed bumps, drive'n in circles,
vehicle running out of gas.
they're a gap in our generation, between adults and kids.
but since i'm bilingual
i'ma use communication as a bridge.

Burma/Myanmar

Burmese American art is a vibrant and evolving field that reflects the rich cultural heritage of Myanmar (Burma) while also engaging with the experiences of diaspora and the dynamics of life in the United States. Artists of Burmese descent in America explore themes of identity, inter-generational dialogue, migration and displacement, as well as political and social commentary, often blending traditional Burmese techniques and motifs with contemporary styles and mediums. For my purposes, I focus on a specific artist in exile whose work reflects her experiences of forced migration due to repression and censorship.

Among the politically oriented artists-in-exile working today, Chaw Ei Thein is perhaps the most prominent one. Her work, which draws upon performance art, painting, multimedia installations explore themes such as freedom of expression, human rights, and the complexities of life under an authoritarian regime. Her paintings and have been shown in the US, Europe and Japan, including Fukuoka and Tokyo.

Growing up in Myanmar, she experienced firsthand the effects of political oppression and censorship under the military dictatorship that ruled the country for decades. Despite the restrictive environment, she pursued a career in the arts, using her work as a means of self-expression and resistance. As a consequence, much of her art addresses issues such as political repression, freedom of expression, and human rights. In particular, she often uses her own body in her performances to convey messages about vulnerability, resistance, and resilience, challenging societal norms and government censorship.

One of her notable performances is “The Burmese Dream” (2008), which was a collaboration with artist Htein Lin. The performance involved setting up a street-side installation with mannequins in prison uniforms, symbolizing the political prisoners in Myanmar. This piece was intended to draw attention to the lack of freedom and the harsh realities faced by dissenters in Myanmar. On another occasion, she

carried out a street installation, again with her friend Htein Lin, to comment on the inflated prices under the current Burmese government. They sold small items like candy and ribbons for miniscule amounts of money. They were arrested and would have been jailed if it were not for the fact that the police were too busy at the moment. Their performative acts, criticizing a government where civil rights and freedom of speech is limited, led to Thein's exile from her country. Despite her resettlement to the United States, the past continues to influence her present, as is also the case for nearly all Southeast Asian refugees.

Firstly, I am a Burmese artist living under a military junta, I am used to being limited with what I can and cannot create inside Burma. We have a level of self-censorship before we show our work in public. If we want to say something, we have to consider the possibilities of censorship: is it safe if I show this in public? What problems may occur if I use this color or that subject with this concept? Do they think there is too much information? And so on... With time, all these limitations have become my second nature. There is a problem now whenever I want to create something: I have controlled myself already, automatically. This is always following me and controlling my creativity. Even when I get a chance to create my art outside of Burma, it still affects me. At the same time, I do worry about my family in Burma; if I do this or if I do that, what will happen to them? These "fears" and "worries" control me even when I am creating art outside of Burma. It is real and affects me all the time."³⁰

Due to her outspoken activism and the political nature of her work, Chaw Ei Thein faced significant challenges in Myanmar, including surveillance and censorship.³¹ Eventually, she left Myanmar and relocated to the United States, where she continues to create art and advocate for democracy and human rights in Myanmar.

Conclusion

I began my talk with a summary of James Scott's argument about the advantages and disadvantages of "seeking like a state" with regard to refugees. I also proposed that NGOs, academics, and service providers function in much the same way. As a result, "refugees" in the collective sense are hyper-visible, that is, at-risk populations the need paternalistic care. But, as I also pointed out, this approach, however well-intentioned, makes refugees in the individual or community sense invisible. That is, we all too often fail to recognize their own desires and needs as well as their creativity and resilience. That is why I

³⁰ "Like a Fever: Interview with Chaw Ei Thein," *Asia Art Archive*,

<https://aaa.org.hk/en/like-a-fever/like-a-fever/interview-with-chaw-ei-thein/type/conversations>.

³¹ Vivian Lee, "Chaw Ei Thein Fights Burma's Junta with Performance and Paintings," *Free Dimensional* (2 November 2010), <https://fd.artistsafety.net/2010/11/chaw-ei-thein-fights-burmas-junta-with-performance-and-paintings-world-policy-blog-3/>

featured three examples of refugee cultural expression—Vietnamese American “Boat People” memorials, Khmer American rap music, and paintings by a Burmese artist in-exile in the United States. Close attention to these forms of expression reveals what is missed when we institutionally silence, depoliticize, and de-historicize what produced the refugee flows in the first place.³² In the case of Southeast Asia, that would be the outsized role US anti-communist imperialism play in the death and displacement of millions of people. That is why critics of the neoliberal “refugee industrial complex” that shapes resettlement in the United States must move beyond the generic category of “the refugee.”³³ The label hides too many important intersectional differences both between Vietnamese, Cambodian, and Burmese refugees as well sub-groups within them. These differences may be racial, ethnic, religious, ideological, gendered, among other possibilities. In short, as Japan begins to think about immigration and refugee policy changes, beware of any claim that a “one-size fits all” approach will work. It will not, as the diverse experiences and desires of Southeast Asian refugees in the United States makes clear. Instead, joint approaches that give refugee-selected representatives a meaningful “seat at policy table” are needed. It is my hope that Japan will learn from my country’s hard-won experiences and thus avoid our mistakes.

Thank you for your attention.

コ メ ン ト

今村 真央（山形大学）

（上水流） MacLean さんからは、歴史から個々人に注目した話まで頂戴し、本シンポジウムにおける大きな議論の手掛かりを得ることができた。感謝を申し上げる。それでは、MacLean さんの基調講演に対して山形大学の今村さんからコメントを頂きたい。

（今村） Thank you all for coming, and for those participating both in person and online.

First, I’d like to express my appreciation to the organizers of today’s event. I also want to thank the interpreters—simultaneous translation is no easy task. And of course, sincere thanks to our keynote speaker.

Ken, since I know you personally, I hope you’ll permit me to call you by name. Your talk was truly remarkable—spanning three countries in a coherent and compelling way. Perhaps only someone with your experience could deliver such a presentation. You began as a Vietnam specialist in graduate school, but your academic curiosity could not be contained within the confines of Vietnamese Studies. You moved on to work on Myanmar, and now you’re conducting fieldwork in Cambodia. It’s rare to find someone who can speak authoritatively and empathetically about these three, or even four countries—

³² Mike Classon Frangos and Sheila Ghose, “Why Refugee Genres? Refugee Representation and Cultural Form.” In, Frangos and Ghose, eds., *Refugee Genres* (New York: Palgrave and Macmillan, 2022), 5.

³³ Amira Al-Dasouqi, “‘Refugee Industrial Complex,’ Neoliberal Governance Within the Resettlement Industry and Its Effects: Is An Alternative Structure Possible?” (2016).

Laos included.

I will keep my remarks brief. I want to raise a few questions while also highlighting key insights from your talk. In one seamless narrative, you managed to cover multiple national contexts and then, in the latter half, shift focus to the United States, offering thoughtful reflections on how Southeast Asian refugees have navigated life there.

While you discussed the failures and shortcomings of U.S. refugee policy, as a listener I couldn't help but be struck by the sheer scale and energy of the U.S. response. After all, the United States has taken in a remarkably large number of refugees—especially in contrast to Japan. Of course, the U.S. is a challenging environment, shaped by a distinctly neoliberal ethos. Refugees are expected to sink or swim. Welfare support is short-lived. Refugees often have no one but themselves to rely on to succeed—or fail. Dr. MacLean highlighted many of the systemic obstacles refugees face, backed by striking statistical evidence. Racism, prejudice, poverty, and limited access to opportunity are all real and serious concerns. But at the same time, your talk—perhaps inadvertently—also revealed how some refugees have achieved remarkable success despite these conditions. How are such achievements possible within such a tough social and economic landscape?

Take, for instance, Chaw Ei Thein, the Myanmar artist. I had the pleasure of meeting her many years ago in Singapore, where she was exhibiting a powerful piece. At the time, she moved between Singapore, Japan, and Myanmar, and confided in me her concern for her family due to her outspoken criticism of the Myanmar government. And yet, after all her struggles, she chose to live and work in the United States. What kind of force draws someone like her to the U.S.? It is something worth pondering. We are reminded that the U.S. was deeply involved in devastating conflicts, especially in Southeast Asia, which displaced millions. Yet, the same country also resettled around half of those displaced—bringing them in and, over time, granting them citizenship. I'm not romanticizing this decision, but the scale is simply staggering. It invites comparison—albeit imperfect—with Japan.

Japan and the U.S. are vastly different countries, so perhaps comparisons are of limited value. Still, the contrast is hard to ignore. Since 1978, Japan has officially recognized just 1,420 refugees in total. That number is startling.

In contrast, the U.S. routinely admits tens of thousands of refugees annually. This openness wasn't among the “mistakes” that your talk critiqued. Given the two countries' different historical trajectories, cultures, and political systems, it's hard to say why the gap is so wide. Still, the fact remains: many refugees not only survive but thrive in the U.S.—and some actively choose to make it their home. Japan began its third-country resettlement program in 2010. Many of the resettled refugees have come from camps along the Thai-Myanmar border. And yet, since the program's inception, only 250 individuals have been resettled. I would guess that more than 250 government officials have worked on the program. The number is minuscule. In the second half of this conference, we'll hear more detailed case studies about refugee lives in Japan, so I'll leave the finer points to them.

After listening to your plenary, I came away thinking—despite your own critical framing—that perhaps the U.S. is doing many things right. Of course, the challenges are enormous. But many of the problems refugees face—poverty, discrimination, inequality—are not unique to them. These are structural issues that also affect citizens. When it comes to refugee integration, perhaps there are things

Japan can learn from the American experience.

Or is it naïve to think Japan can draw lessons from the U.S.? After all, the U.S. is a superpower. It has the capacity not only to project its influence globally but also to absorb large and diverse populations. That is what empires do. Japan is not an empire—and perhaps cannot, or should not, emulate that model. Still, might there be something inspiring in the American ideal of the multicultural “melting pot”? Let me now raise a historical question. What were U.S. refugee policies like before 1980? Did the fall of Saigon in 1975 fundamentally reshape refugee policy, or was a framework already in place? While I understand that “refugee” is a relatively modern category, the post–World War II period saw millions displaced. The Refugee Convention already existed. So why didn’t the U.S. do more before 1975? Perhaps this is a straightforward historical inquiry, but it seems an important one.

Finally, a theoretical point: in her work on nationalism, Liah Greenfeld distinguishes between civic nationalism and ethnic nationalism. The United States exemplifies civic nationalism—anyone born there becomes a citizen. In Japan, by contrast, citizenship is ethnically defined. If Japan is to become more welcoming to refugees, perhaps ethnic nationalism is not enough. We may need to evolve toward a model rooted more in civic principles. Maybe this typology helps us understand the divergent refugee policies of our two countries.

That concludes my comments. Thank you again.

リ プ ラ イ

(上水流) 今村さんより基調講演に対して三つほどご意見を頂いたので、MacLean さんからリプライをお願いしたい。

(MacLean) Thank you, Masao-san, for the questions—and for calling me out on my negativity. I’m a scholar of human rights and genocide, as well as a human rights practitioner, and I tend to be cynical and focus on the negative. My students often complain about that, but it’s just who I am.

That said, you’re absolutely right. The United States has, in many respects, been incredibly successful in integrating refugees. I should clarify—as you probably gathered from my presentation—I focused on refugees. I didn’t speak much about immigrants, even though refugees are a type of immigrant, albeit usually not voluntary. The two groups overlap, but they aren’t the same.

You’ve probably heard the phrase, “The United States is a nation of immigrants.” That’s arguably more true here than in almost any other country, aside from the Indigenous peoples—who, in a tragic twist, became refugees in their own land. Everyone else, in one way or another, came from somewhere else. The entire country is built on migration.

Part of the challenge, especially in light of the recent election, is that people tend to forget that they were once welcomed—or that space was made for them—and now they want to shut the door to others. That’s a recurring issue.

But, as you invited me to do, Masao-san, let me focus on the positive. We have refugees and children of refugees serving in the U.S. Congress. We have millionaires, doctors, lawyers, PhDs, and more.

Southeast Asian communities, in particular, have demonstrated a tremendous track record of professional and social success. I regret not highlighting that more in my earlier remarks.

You also raised questions about U.S. immigration and refugee policy. I'm not an expert in U.S. law—I focus more on international systems—but to my understanding, the U.S. didn't have a coherent national refugee policy until the Indochina crisis. After World War II, the initial priority was returning displaced persons to Europe or resettling European Jews in what became Israel. There wasn't much emphasis on accepting war refugees into the U.S.

That began to shift in the 1960s and '70s, largely due to Cold War dynamics. Although the U.S. still lacked a comprehensive refugee policy, it was relatively easy for people fleeing Cuba, the Soviet Union, or Eastern Bloc countries to seek asylum.

In the case of Cuba, there was an informal “wet foot, dry foot” policy: if you were fleeing by boat and managed to set one foot on U.S. soil—even if the other was still in the water—you could qualify for automatic citizenship. That was part of Cold War propaganda, and while the numbers weren't insignificant, they were nowhere near the scale of what happened with Southeast Asia.

On broader immigration policy: the U.S. has gone through cycles of openness and restriction. You may recall the Chinese Exclusion Act of the late 19th century, when Chinese laborers were banned after having built railroads and mined gold. Similarly, Mexican laborers were welcomed into agricultural fields for a time—then expelled when it was deemed there were too many.

In short, U.S. immigration and refugee history is complicated. It varies dramatically by group, and the trajectory is not always linear—sometimes it's progressive, sometimes regressive.

Now, to the lessons the U.S. experience might offer Japan. As you rightly noted, the scale is dramatically different. Japan is far more homogeneous, whereas many regions in the U.S. have immigrant majorities rather than White majorities.

First, there are major issues with the neoliberal model of refugee resettlement in the U.S. The federal government provides only 90 days of support. After that, a refugee—who may speak no English, may be separated from family, and likely carries trauma—is expected to find housing, employment, and navigate transportation. Ninety days is simply not enough.

The real support often comes from nonprofits and NGOs. These organizations help refugees find jobs and housing and, crucially, connect them with earlier generations of immigrants who serve as cultural and literal translators. They explain how to navigate U.S. bureaucracy and daily life. These NGOs are often underfunded and rely on state or philanthropic support, but they've stepped in where government assistance falls short—and they've had remarkable success.

Sometimes the help is very practical. I always joke: if someone had given me a refugee visa to Japan while Trump was president, I would've needed someone to walk me through a grocery store—“This is what this vegetable is, here's how you cook it, here's why it's good for your kids.” It sounds simple, but it makes all the difference.

Community gardens have also been a huge success. Refugees not only earn wages by working them, but they're also allocated plots to grow culturally familiar food. This kind of connection to home helps ease anxiety and fosters a sense of belonging.

Learning English is obviously easiest for children, who pick it up at school. For adults, adequate

support is crucial so they can gain the language skills needed not just for work, but to build real relationships with members of the host society.

And finally, we need to acknowledge the phenomenon of secondary migration. Many refugees initially settle in one part of the U.S. but later move to be near members of their own community or to find work in familiar industries. That's why we have large Vietnamese populations on the Gulf Coast—Louisiana, Texas—where they can grow rice and fish for shrimp, just as they did back home.

For some, finding work in familiar industries makes all the difference. For others, it's about forming critical mass—like in Long Beach, California, or Lowell, Massachusetts—where enough people share their language and culture to form strong communities, but also serve as bridges to wider society. Being truly bicultural and bilingual is key to refugee and immigrant success.

Did I answer all your questions, Masao-san? Great. I'll pause here. Should we take questions from the audience, or is the next discussant going to speak? What's the procedure?

質 疑 応 答

(上水流) 5分ほど時間を取って基調講演に関して質疑応答を行いたいオンラインの方も含め、手を挙げて発言していただければと思う。

(スティーブン) Hi, this is Stephen from Hitotsubashi University Graduate School of Social Sciences. Thank you so much for your presentation. It was very, very informative, and I think I learned a lot from it.

I'll try and keep my question short and to the point. You mentioned the idea of, I'm sort of thinking about it as I ask it actually, but you mentioned the idea of not being eternally grateful, and I think this was from the Critical Refugee Studies group. Is that right?

(MacLean) That's correct.

(スティーブン) Right. Which sounds really interesting, I want to find out more about them actually, but I felt that that was very important. It's similar to something I've heard some people say who are refugees or groups who are refugees who are supporting other refugees or former detainees in my country, Australia, for example. They are very critical of the government, having experienced immigration detention and so on, and don't want to feel like they have a right to actually be critical, speaking of being negative, but refugees actually being critical of, for example, Australia's harsh detention policies, just to give one example.

I thought that was very important, the idea that just because of refugees being 'saved' by being provided with a place to stay doesn't mean that they shouldn't continue to have to feel like they're always grateful and that they maybe should be allowed to be critical. For example, if I don't know, Guatemalan or El Salvadorian and the US was very hostile to them, didn't actually accept them as refugees and is still maybe not accepting them, for example.

But as a question, how is the idea of, "Oh, refugees should." Maybe you already mentioned it enough, but could you maybe speak a bit more about how it's problematic when maybe scholars, for example, or NGO workers or aid workers, human rights activists, actually, even if they're not aware of it, they expect refugees to be grateful, "Oh, you were helped by our country," so maybe it's implicit in the way, how can this be problematic or how have you seen it manifest itself and be problematic?

(MacLean) Great set, and I appreciate the comparison with Australia, which you know better than I do, has had its own issues. Well, you've got the hard form, the 'love it' or 'leave it', you have no right as a refugee. Even though they didn't necessarily choose to come to the United States, that's where they were sent. They didn't get to have a say in most cases, that they have no right to be critical, even as it refers to the policies and programs and practices that most directly affect their lives where I think they should have some say. They should have some input because it's their lives as opposed to broader policy issues.

It takes some form. There are many different service providers, so I'm trying not to generalize. There are religious ones where there may or may not be subtle pressure to become a member of that faith. Sometimes that's extreme.

During the Cambodian refugee crisis in Thailand, an NGO, I won't mention, would give you glasses if you needed glasses, provided that you would become a Christian. That's an extreme example, but certainly it happened.

I think the place where it appears most clearly, in my view, is where people, and often unintentionally or with the best of intentions, speak for or on behalf of refugees. You assume you know what they want and need, and you don't engage in proper consultation, or you do it simply with the power brokers in the community and never get wider input from those people who might not be in privileged positions.

The power brokers within refugee and immigrant communities may or may not have their own agendas and they may or may not represent the actual interests, needs, and desires of the communities they say they represent.

Trying to find a more inclusive way of involving refugees, for example, rather than always going through a leader is, I think, one of the most important ways you can avoid reproducing that problem and having it play out in ways that are not beneficial to the broader community.

I don't know if that quite answers your question, Steven. I'm happy to talk about it more at break. But it's a genuine problem.

(上水流) まだいろいろと意見や質問はあろうかと思うが、予定の時間を超えているのでここでいったん第1部を終了したい。第2部で日本の事例を議論するに当たり、非常に参考になる基調講演とコメント、質疑応答だった。休憩を取り、第2部は開始を10分遅らせて3時20分からとする。MacLeanさんにもう一度拍手をお願いしたい。

第2部

日本社会に生きるということ 日本社会を越えて生きるということ

(上水流) 第2部を開始する。最初は「ベトナム難民2世の定着をめぐって—教育と介護の視点から—」と題して、摂南大学の落合さんから教育編、武庫川女子大学の野上さんから介護編としてご発表いただく。野上さんは本務の都合でどうしても参加がかなわず動画での報告となる。この点、ご了承ください。

1-1. 「ベトナム難民2世の定着をめぐって—教育と介護の視点から—」：教育編 落合 知子氏（摂南大学）

私は専門が母語・継承語教育³⁴なので、ベトナム系の住民たちがどう言葉をつないでいるのか、アイデンティティをどのようにつくっているのかという話を中心にさせていただきます。

日本におけるベトナム難民2世の現状

日本全体でのベトナム難民定住許可数は8,656人である。一方、難民以外にも留学生や技能実習生などさまざまな方がベトナムから日本に来ており、現在、日本にいるベトナム系住民は50万人超といわれている。例えば神戸市のベトナム系住民は8,762人で日本全国のベトナム難民とほぼ同数なので、全体から見ると難民は非常に少ないことが分かる。

そのさまざまな背景を背負った子どもたちが公立小学校で出会うわけだが、神戸市では兵庫県の事業として2006年から2010年まで母語支援センター校が県下10数校に置かれ、その事業終了後も神戸市の独自予算で日本語教育に資する母語教育としていくつかの学校で母語・継承語支援が行われている。そのうちの一つ、神戸市立の甲小学校（仮称）においてベトナム語母語・継承語教室での観察を基に報告をする。私はそこでベトナム難民の方々と出会い、現在に至るまで18年間で70人のベトナム系の子どもたちの母語・継承語教育に携わってきた。この70名のうち8名が難民ルーツの子どもたちである。この8名は難民にはカウントされていない。難民認定された親世代が2005年ごろになってから呼び寄せた家族や、こちらで生まれた子どもたちだが、70人のうち1割以上が難民ルーツの子ど

³⁴母語・継承語の定義について確認する。母語とは「最初に学んだ言語」「自分のアイデンティティに関わると自己もしくは他者に認識されている言語」であり、時に「もっとも得意とする言語」「もっともよく使用している言語」であるという。

それに対して継承語とは、「言語形成の完成以前に国際移動をした1.5世移民と、現地で生まれた2世以降の外国につながる子どもたちの親（時に祖先）の言語であり、当事者のアイデンティティに何らかのかかわりのある言語」と規定して、本報告では議論する。基本的に本稿では1.5世移民から2世3世を取り上げるため「継承語」の語を用いるが文科省や地方自治体が「母語」を用いている場合はそれに準じる。

もたちということになる。

神戸市甲小学校は、子どもたちのうち約 1 割がベトナム人の子で、その子たちに母語・継承語であるベトナム語を伝える支援をする教室を設置している。なお、最近はこの近隣で始まった NPO の継承語・継承文化教室にも関わっているの、その話にも後ほど少し触れたいと思っている。

継承語学習動機の低下と高揚

今日お話しするのは、2020 年当時 18～24 歳だった 3 名のベトナム人青年についてである。3 人とも難民の父親の下で日本に生まれた、あるいは呼び寄せられた子たちで、彼らのライフストーリー・インタビューを基にした発表である。3 人とも、自らのベトナムルーツを否定した時期を持っている。小学校高学年から中学校に至るまでベトナム語を学ぶことを拒否しており、ベトナムルーツである自分を隠したいという時期は多くの子が持つ。一定時期ベトナムルーツを持つことを否定しても、大学以降、ベトナムルーツを取り戻していく事例が多い。彼らから聞いた話を KJ 法でカード化し、ベトナムルーツを否定している発言、肯定している発言を表にした（スライド 8）。小学校、中学校、高校までは否定的な発言が非常に目立つが、大学生以降、肯定へと転換する。そこに何があったのかという点に着目した。

小学校から中学校にかけてベトナムルーツへのアイデンティティ意識が非常に低下する、継承語を拒否するといった現象は、北山や落合の研究で、また、高校卒業以降キャリアを考えたときにもう一度ベトナムのルーツに戻っていく高揚期があるということは、中川先生や落合などが研究にまとめている。

彼らは中学校の頃の思い出を語らせるととにかくベトナムルーツを否定的に語るのだが、その内容を具体的に見てみたい。B 君は現在 NPO の継承語講師を務めるほどベトナムルーツに回帰しているのだが、そのような彼が中学校時代になぜベトナムルーツを否定していたかという、「ベトナムを意識するときは必ず羞恥心を感じていた。ベトナムってワードが出た時点で何にしるベトナムを連想させるものはすごい羞恥心があった」、あるいは周りの友達、クラスメイトに否定されたり、中学校時代にいじめに遭ったという話もしているが、そうした経験を中学校時代の否定の要因として語るのである。さらに、親が「何でこれ分らないの?」「これ知っていてほしい」、「知っていてくれたらうれしい」とポジティブな言葉を装いつつ、非常に高いレベルのベトナム語話者であることを求めてくる。そういうことも彼にとっては非常にプレッシャーであったという。

家庭においてはベトナム語、学校においては日本語を語ることを強く求められる中で、彼らは継承語不安（heritage language anxiety）を抱えていく。これは多くの移民 2 世で見られる現象だが、自分のルーツを否定してしまう、あるいは継承語を語ることを恐れてしまう状況が生じるのである。日本語が非常に権威的である学校空間と、ベトナム語を話すことを強く求められる家庭と、その両方のモノリンガリズムの中で彼らは強いプレッシャーを感じてしまう。

否定から肯定へのエピファニー

その中で、どうやって彼らがベトナムルーツを持つことを肯定的に捉えるように転じた

のか、若者世代になった母語・継承語教室の卒業生たちに聞いて回った。B 君は「とにかく一度ベトナムに帰ろうと思った」と言う。大学 4 年生のときに 12 年ぶりにベトナムへ帰るのだが、「そのきっかけは大学の実習で台湾に行き、そこで自分の国はどうなんだろう、発展しているのかな、って考えて親戚にも会いたいし行ってみようと思った。(ベトナムで) 実際に親戚に会って優しく受け入れてくれた。それをきっかけにベトナム語の教科書で勉強を再開した」と語っている。

また Aさんは、大学の級友からベトナムルーツへの肯定的な評価が得られたり、特に彼女は有名な自動車会社に就職したのだが、就職活動の採用担当者か「ベトナム語がしゃべれるなんて有望だ」と言ってもらえたり、1 次、2 次と就職試験を進んでいく中で「ああ、ベトナムの子だね」と覚えてもらえたり、そうした経験がプラスに働いた。別の子は SNS でベトナム留学生や本国の親戚とつながる経験などを語っている。彼らがマイナスに捉えていたベトナムルーツをプラスに転換させていく様子を窺うことができた。

否定から肯定へと転換することをエピファニー（人生の転機）というが、家庭と学校以外の場所に世界が広がることによって、大学生以降、ベトナムアイデンティティを肯定してベトナム語の勉強の再開につながったといえる。

メタカルチュラリズムの世界へ

二つのアイデンティティの中を揺れながら、彼らがルーツにつながる文化とホスト社会の文化をつなぐ仲介者となり、世界と自分たちをつなぐメタカルチュラリズムの世界（第 3 の文化）を抱いていくことを Berry や Keefe & Padilla はこのように象限化している（スライド 16）。

最後にビデオでその様子をリアルで見たい。

—映像再生—

これは今年 8 月にハノイの水上人形劇団を迎えて行った NPO のサマースクールの様子である。非常に有名な劇団で、その現役演技者が 2 人来てくれて、ベトナムルーツの子どもたちに人形劇を教える。これは練習風景だが、この後、実際に地域の人たちの前で披露する。その本番前に、水上人形劇の芸術監督の方が子どもたちに向かって話しているのを、先ほどの B 君が通訳している。難しい言葉で通訳できる人は留学生を含めてたくさんいたが、B 君はここで継承語講師をしているので、子どもに通じる言葉で監督の言葉を翻訳している。「ここでベトナムの水上人形劇を学んだという特別な経験をみんなの宝物にして、それをみんなの生きる糧にしたい」。B 君自身ベトナムルーツを否定していた経験があるので、ベトナムの子たちに継承語・継承文化教室で語ること自体、非常に慎重になっていた。この中の子どもたちにもベトナム文化を学ぶことを嫌がっている子が何人かいて、水上人形劇を習っている最中に逃亡した子もいたのだが、水上人形劇というコンテンツがやはりパワフルだった。水の中に浸かって暑い夏に人形を操作するという経験は子どもたちには強烈だった。それを 20 代後半になった B 君が一生懸命翻訳しながら、「この経験を宝物にしたい」と子どもたちに伝えるシーンである。

—映像再生—

最後、水上人形劇の芸術監督がベトナム語で「わーっ」と子どもたちに話しかけているのを、彼が子どもたちに通じる言葉で翻訳している。2 世は 1 世と日本社会をつなぐだけ

でなく、さまざまな隙間をプレッシャーを感じながらも乗り越えてきた。例えば子どもたちとベトナム人芸術監督という、世代も言葉も育った環境も違う人々をつなぐ力を持っているのではないか。複数の文化の中を揺れながら育っていった彼らが、複数の世界をつなぐ力である媒介力、文化の仲介力を得たと言えるのではないだろうか。

1-2. 「ベトナム難民 2 世の定着をめぐる一教育と介護の視点から」：介護編 野上 恵美氏（武庫川女子大学）

諸事情により録画による発表になったことを心よりお詫び申し上げます。本報告では、介護されるベトナム難民 1 世と介護するベトナム難民 2 世の状況を示すことで、ベトナム難民 2 世の定着について考察したい。本報告で扱う事例は、私が 2005 年から関わりを持っている神戸市長田区に居住する家族の事例で、今年に入ってから介護に関する動向をまとめたものである。

本報告の背景と方向性

まず、本報告の背景についてお話しする。1980 年代に日本で定住を開始したベトナム難民 1 世の高齢化が言及されるようになったのは、定住からおおよそ 30 年が経過した 2010 年代である。看護学、社会福祉学の研究において、ベトナム難民 1 世の社会的・経済的脆弱さに着目し、支援体制構築の重要性が指摘された。しかしながら、その頃は高齢化といっても年齢的に自立的な生活を送ることができていたことから、今ほどは社会問題化していなかった。

ベトナム難民 1 世の高齢者を含む在日外国人の高齢化が本格的に社会問題化したのは 2020 年に入ってからだと考える。この頃になると高齢化がますます進み、自立生活を送ることが困難な事例が増えてきたことが推察される。全国で有数の外国人集住地域である愛知県は、2021 年に外国人高齢者に関する実態報告書を出している。本報告と実態報告書が関連する点は、「外国人高齢者の居場所づくり」である。ここまでの本報告の背景となる。

次に、本報告の方向性についてお話しするが、その前にベトナム難民 1 世の高齢者に関する前提として、ベトナム社会のケア規範と生活習慣について簡単に述べておきたい。ベトナムでは、親自身、老後は子に介護してほしいと強く願っている。補足すると、施設に入るのではなく家にいることを願っている。一方で、子も老いた親の介護は自分たちがするものと思っている。また、これまでの調査を通じて感じていることだが、ベトナム人の多くは自宅に他人を招き入れることに対して抵抗感というか気負いがない印象がある。同様のことは日本に暮らすベトナム難民家族にもいえる。

ベトナム社会の規範や生活習慣の在り方に強く影響を受けているベトナム難民 1 世の高齢者にとって、どのような介護が望ましいのかを考えると、保健学領域の研究から有効な視点を得ることができた。今年 6 月に開催された研究会で発表された、神戸大学の山口先生の発表に大きな示唆を受けた。それは、在宅医療・介護サービスからベトナム難民 1 世の高齢者の介護について考えるという視点である。この発表を聞いた後、実際にこれまで自宅で家族から介護を受けていたベトナム難民 1 世の高齢者が在宅介護サービスを受け

るようになったという事例が生じたのである。

ベトナム難民1世の介護事例

今からお話しする家族は、私が長年関わっているベトナム難民家族である。現在 A 夫妻は 80 代になり、50 代の次女、40 代の四女が主に親の介護を担っている。60 代の長男は、次女と四女と異なる形で親と関わっている。次女と四女がどのような介護を行っているか、そして長男がどのような関わり方をしているかは後ほど説明する。

A 夫妻の健康状態は、A 本人はここ 2〜3 年、入退院を繰り返している。A は入院に対して強い拒否感を示しており、現在は体に溜まった水を抜くために定期的に通院している。妻は目立った内臓疾患はないが、足腰の衰えが著しく長時間立ち続けることや自立歩行が難しい状態にある。

親の介護で主要になるのは、複数箇所にあつた病院への同行である。A 夫妻の日本語によるコミュニケーション能力は初歩的な日常会話レベルなので、病院へ行くときは必ず通訳ができる次女か四女が同行することになる。次女は自動車免許を持っているので、歩行が難しくなりつつある親を自宅から遠い病院へ連れて行くときは運転も担うことになる。次女と四女は仕事をしていることから、どうしても病院へ同行できないときは、A 夫妻はタクシーを利用して病院へ行く。最近は病院へ行く頻度が高くなりつつあり、次女と四女も毎回同行することが難しいことからタクシー代がかかってしまうことが悩みとなっている。

四女の子は、祖父母に当たる A 夫妻宅へ乳幼児のころから頻繁に泊まりに行っていたことから、現在も週末は必ず A 夫妻宅へ泊まりに行っている。A は徐々に衰弱が見られるものの孫が泊まりに来ることを生きがいに思っているようである。長男は親が寂しがっているという理由で A 夫妻宅へ来ているが、次女や四女のように介護するのではなく自分にとって母親である A の妻に食事を作ってもらっているようである。妻は痛む足をかばいながら長男のために食事を作っている。

徐々に頻度が高まる A 夫妻の通院に対応するために、次女が介護認定をもらうために動き始める。結果、要介護認定となり介護タクシーが使えるようになった。介護認定を受ける際、ケアマネジャーから在宅ヘルパーの利用も提案され、次女は賛成したのだが A 夫妻が日本人は嫌だという理由からヘルパーの利用を断った。日本人ヘルパーの利用を断る理由の一つとしてヘルパーから提供される料理が考えられる。A 夫妻は和食の味付けを好まないことから、ニョクナム(魚醬)を使ったベトナム料理を作ることができない日本人ヘルパーに抵抗感を持ったようである。ところが、A 夫妻がお世話になっている介護事業所にベトナム人ヘルパーがいることが分かった途端、A 夫妻はヘルパーに来てもらうことを望むようになった。現在、A 夫妻は家族とベトナム人ヘルパーから介護を受けており特に問題もなく穏やかに過ごしている。

まとめ

まとめに入る。今後、ベトナム難民1世の高齢化が進むと A 夫妻の事例のようにベトナム人ヘルパーが求められる状況が増えるのではないかと予想している。このことは、親が望む母語や母文化を基盤とした居場所の獲得が実現でき親子ともに望ましい状態であるといえる。

それでは、そのような状態は、誰がどうなることによって実現できるのかを今回の事例から考えてみると、子が日本の社会資源にいかにかアクセスできるかが重要になってくる。つまり、子である2世は日本の社会資源を利活用するリテラシーを身に付けることが求められているともいえる。一方で、落合さんの報告にあるように2世は継承語の習得を期待されている。このことから、ベトナム難民2世の定着について考えると、彼らは言語的に多くのことを求められており、そのような点においては高いプレッシャーにさらされているのではないかと考える（参考文献：スライド28に掲載のとおり）。

（落合） 野上さんの発表では、2世は高いプレッシャーにさらされているというのが結論だが、プレッシャーにさらされつつ二つの世界の調停者として仲介しているということも一つの結論なのではないかと思いながら、野上さんの発表を聞かせていただいた。以上である。

（上水流） 続いて、兵庫県立大学の乾さんより「ラオス難民定住の軌跡—葛藤と楽観性の狭間で」というタイトルで発表いただく。

2. 「ラオス難民定住の軌跡—葛藤と楽観性の狭間で」

乾 美紀氏（兵庫県立大学）

本日の講演の背景と目的

私は大学卒業後すぐにアメリカのウィスコンシン州に行ったのだが、そのとき先ほどKen先生も触れられたHmong（モン）というラオスからの難民の子どもたちに出会ったことをきっかけに、ラオスの研究を始めた。ラオスでは少数民族の研究をしていたが、今もずっとラオスの難民の研究をしており、比較教育学と多文化共生教育を専門としている。

日本帰国後、日本にもラオス難民がいることが分かり、ここ30年ほど兵庫県在住のインドシナ難民の人たちと関わってきた。本日の講演では、ラオス難民が日本（特に兵庫県）に定住してから、どのような葛藤を抱き、どのように問題を乗り越えてきたかについて報告する。特に私は彼らの相談に乗ることが多いので、彼らから受けた相談事項から分析していきたい。人数が少ないラオス難民が、どのように日本社会を超えて生きているかということを説明できればと思っている。

ラオス定住難民との関わり

まず、私とラオス難民との関わりだが、アメリカから帰ってきたときに兵庫県にもラオス人がいるということが分かり、彼らが子どもの進路や生活相談、帰化書類の準備などの面で問題を抱えていることを知り、ボランティアが必要だと思い、ラオス研究を進めながら姫路近辺の定住者の人たちに関わってきた。また、神奈川県と兵庫県の定住難民にインタビューをする機会もあった。

私が一番驚いたのは、日本とアメリカでの難民の受け入れの違いである。アメリカでは高校に行くのが当たり前で大学にも行ったりしているが、姫路定住のラオス難民の子ども

たちは高校を卒業している人も非常に少なかった。どうしてこれほど違うのかと強い衝撃を受け、もっとラオス難民のことを調べようと思った。

ラオス人定住の概略

日本の定住難民の受け入れは 1979 年から始まり、私がよく調査している地域にあった姫路定住促進センターは 1979 年から 1996 年まで、神奈川県の大和定住促進センターは 1980 年から 1998 年まで受け入れを行った歴史がある。本発表では特に兵庫県姫路市に焦点を当てる。

日本におけるインドシナ難民の定住許可数は、ベトナム人は先ほど落合先生の発表にあったとおり約 8500 人で、ラオスとカンボジアはそれぞれ 1300 人程度と非常に少ない。ミニマイノリティといっていけるだけの少なさで、兵庫県にベトナム人は多いがラオス人は少なく、本当に見えないマイノリティとして暮らしているというのが特徴といえる。

姫路に姫路定住促進センターがあった頃、難民は 30～40 代が多く、子どもを連れて日本に定住してきた人たちが多かった。砥堀小学校とマリア病院を備えていたこと、元々カトリック教会が難民を受け入れていた歴史もあって、ここに定住促進センターをつくることになった。姫路センターで受け入れた人数は、ベトナム人が 2,201 人、ラオス人は 439 人しかいない。大和センターではカンボジア人が 1,217 人、ラオス人が 857 人、ベトナム人が 567 人で、関西でベトナムとラオスを受け入れたのだが、ラオスはまだ少ない。兵庫県においては、姫路市、その北にある福崎町や加西市の辺りにラオス人が定住しており、岡山県や広島県にもたくさんいるが、割と分散傾向にあるのが特徴だと思う。姫路は定住促進センターがあるから多いのだが、福崎町や加西市にも 10～20 家族が住んでいる。本当に合計が少なく国際結婚も進んでいるのでどこまでをラオス人と呼ぶかは難しいが、100 人程度が住んでいる。

ラオス人定住の軌跡

ラオス人の定住初期は 1990 年代後半で、この時期を私は「分離期」と呼んでいる。当時、Lao Unity House というのが姫路にあり、ラオス人はラオス人で暮らし、毎週日曜日に Unity House に集まってパーティーをするのが日常で、日本人は私くらいしか行っていなかった。結婚式も自分たちでやってという感じだったので、日本に属するという考えはあまりなかったのではないと思う。まだ自分たちはラオスに属していて、国民統合の考えからか、難民コミュニティ内で結束して文化を維持している時期だったと思う。「乾さん、どうしよう」と電話がかかってくるのは、働くところがないとか、収入が低いといった相談事だったと記憶している。分離期という誤解を与えるかもしれないが、日本に定住するために同化しようといったことはあまり見られず、日本人とは距離があった。

定住中期（2000～2010 年ごろ）は葛藤期で、調査したり相談に乗ったりしている私も非常にしんどかったのだが、皆が頑張って日本社会で生きていくことを決意した時期である。このときラオスに戻る家族もいたが、やはり何とか日本で頑張って暮らしていこうということで集会所を探したりしていた。当時、相談事が一番多かったのは 1.5 世の子どもたちのことである。先ほど子どもを連れてきた人が多かったと言ったが、その子どもたちが中学校、高校生になったときに、教育継続が困難になり、学業不振に陥った。「うちの子ど

もは勉強が難しく、高校に行くことができない。どうしたらいいか」というような相談がすごく多かった。また、日本人の青少年の犯罪グループに巻き込まれて罪を犯してしまう、ラオスの子どももすごく多かった。

1 世は帰国するか日本に残って日本人となるか葛藤する様子が見られた。毎年 5 月にラオスの人が集まってピーマイという新年（お正月）のお祝いをするのだが、そこに特定のごく限られた日本人を招待し始めた日本人を呼び出した時期である。ただ、先ほどの Lao Unity House は 1 人のラオス人の会社が特別に貸してくれていたプレハブ倉庫で、その会社が閉じられたことで集会場所もなくなってしまい、これからどこで集会をしていこうかということを探している時期であった。

このときに大変だった問題は、高校に進学できない 1.5 世が続出したことである。学業の継続を諦め工場で働く子が非常に多く出た。彼らが口々に言うのは、「来日時に特別な教育を受けなかったし、難民だったけれど特別な扱いはしてもらえなかった」ということだ。アメリカでは、Hmong の子やラオスの子、ベトナムの子もカンボジアの子も ESL に集められて、的確に学校で英語教育をしてもらっていたが、日本ではラオスの子も「普通に日本人の子どもたちと同じクラスにいた」と言っていて、ずっとアメリカにいた私には考えられないような状況であった。

関西ラオス協会に聞いてみた時、高校修了者はほとんどいないそうで、30 人くらい該当生がいたのだが、「幼少のときに来た子どもだと、10%くらいしか高校に行っていない」と言われて強い衝撃を受けた。学習言語が確立する前に教育から疎遠になっているというのがラオスの子どもたちの状況で、アメリカと全然違うこの状況を何とかしてあげたいという気持ちがずっとあった。

では、神奈川はどうかのを見るために、子どもたちがどれくらい教育を受けているか、173 人のデータを集めたことがあった。日本での教育年数は、義務教育が 9 年、高校が 3 年の 12 年だが、兵庫県だと平均 10.3 年だったのだが、神奈川だとそれプラス 1 年 2~3 カ月くらい多いので、高校を出ている子が割といたことが印象的だった。神奈川の教育年数が長い理由を調べてみると、1982 年とかなり昔から支援がなされており、国際教室や日本語教室があるなど非常に恵まれた環境で過ごしていることも分かった。また、3000 万円ほど皆で寄附を集めて古家を買って、そこにラオス寺院をつくって各種行事を開催してした。そのため、アイデンティティが保持され、みんなラオス語も話せており、随分兵庫県とは違うと感じた。神奈川県にはラオス難民が多いということもあると思う。

定住後期（2010~2019 年）は統合期で、コロナ前からすごく変わってきたと思った。相談に乗っていても、「どこかラオス人が集まる場所が欲しい」とか、「日本に帰化したい」という相談が増えてきて、「ラオスに帰ると言っていたのに？」という感想も持ったが、このとき、仏教の信仰を深めながら日本人と共生しつつ暮らす覚悟が見えてきていた。大阪のタイの寺院からお坊さんが来てくれていて、何か行事があったらこの人たちを招いていた。

みんなでラオスのように托鉢をしたり、伝統行事を守るということもしながら、この時期から日本人をピーマイ（お正月）に招待してダンスを教えたり、一緒にバーシーという儀式をしたりと、ラオス人だけと過ごす機会と日本人も招いて過ごす機会との 2 分化が起きていると感じた。それまではラオス人だけと言っていたのが日本人も混ざってよいこ

とになり、だいぶ変わってきたと思った。

近年（コロナ以降）は本当に変わった。正月の集まりに日本人が来ることが多くなり、在日ラオス大使がわざわざ東京から来て参加したりしている。また、葬儀もラオスの上座仏教と日本の大乘仏教が融合し、日本人は喪服を着ていくが、ラオス人はお父さんが亡くなったなら出家するなど、そういう文化を混合した葬儀が開かれたりして、すごく興味深かった。

最近の相談事で多いのは、やはり1世の高齢化である。「みんな病気になるからお見舞金をあげないといけなくてお金がない」「どこの病院に行ったらいいか」といった相談である。また、一時帰国に絡む相談も多く、「帰化することにしたから一時帰国したいが、帰ったらお金をたくさん払って親戚をもてなさないといけないから大変だ」「みんなにお金持ちだろうと思われてしまう」と話した。このような問題を1.5世が支える余裕もないような気がする。

考察①—葛藤を「楽観性」で乗り越える

限定された職業や教育経験の不足を抱え、1世の高齢化や帰国の中で文化の維持も大変になっている。3世、4世にラオスについて教える継承教室を開いたことがあるが、その時「ラオスのことは知らない。ネットで見られるから自分たちで調べる」と言われることもあった。そこに葛藤があるのだが、経済的な自立の問題や将来への不安もある。ただ、最近思うのはタイでいう「マイペンライ」、ラオスでは「ボーペンニャン」というが、そういう精神で乗り切っているのではないかと思う。すごく楽観的に、「仏教があるから大丈夫だ」と、毎回お坊さんが来てお話をしてくれることで同胞のネットワークもすごく盛んで、先日もお葬式に神奈川からわざわざお坊さんが来てくださったりもしていたので、そういうネットワークで乗り越えている。また、支える日本人は増加しており、今年のピーマイ（お正月）もラオス人に加えて日本人も多く来ていた。彼らはボランティアをしていたり、元青年が意外協力隊だったりする人で、いろいろな人に支えられているのだと思った。

考察②—グレーな部分で生きる戦略

今回こういう機会を頂いて、ラオス難民は国民統合なのか多文化共生なのかと検討したが、どちらでもないと思っている。ラオス人はグレーな部分、国民統合と多文化共生の間の部分にすごく居心地の良さを感じているのではないか。どちらにも決めず、自分たちが心地よいところにいることが彼らにとって心地よく日本で過ごせるポイントなのではないか。これを「グレーな部分で生きる戦略」と名付けたが、このような状況はしばらく続くと思われる。私たちホスト社会としてもこのグレーな部分を受け入れる必要があるのではないかと考えている。

（上水流） 長いお付き合いの中から見えてくるお話を頂戴し、全体の議論に対するヒントもたくさん頂いた。続いて3人目の発表は、一橋大学大学院のマキンタヤ スティーブン・パトリックさんである。「国民国家による排除の被害者はどこへ行くのか？—ロヒンギャ難民・移民の移動経路と来日の経験から考える日本社会のミャンマー難民」というタイトルでお話を頂く。

3. 「国民国家による排除の被害者はどこへ行くのか？—ロヒンギャ難民・移民の移動経路と来日の経験から考える日本社会のミャンマー難民」

マキンタヤ スティーブン・パトリック氏（一橋大学大学院）

リサーチクエスション

私は一橋大学の博士後期課程でロヒンギャ難民と、最近はクルド難民の日本での状況について調べている。特にロヒンギャは修士課程のときに主にフィールドワークを行っていたが、博士課程でも追加のフィールドワークを行っている。

今日の発表内容は修士論文でも書いたのだが、その段階ではまだ不十分だったので、投稿論文で改めて考察・発表したものである。本日は、なぜ少数のロヒンギャ難民は日本に来ることを選んだのか、どうやって日本にたどり着くことができたのか、さらに逆に世界にはロヒンギャ難民が非常に多いにもかかわらず、なぜ日本ではこれほど少ないのかという点も同時に考えたい。あまりポジティブな内容にはならないかもしれない。

本講演の概要としては、まず歴史的背景を簡単に整理し、私の研究の方法論について説明した上で、ロヒンギャがどのような理由で国を逃れることになったのか、どのような移動の形態やタイプがあるのか、パイオニアとフォロワーという形で移民研究的に分けてみて、ブローカーの利用、賄賂、トランスナショナルなネットワークや chain migration の役割、どのように通過国を通り抜けたか、家族統合による来日について話し、結論に向かいたい。

歴史的背景

ロヒンギャは、ミャンマーの中でもバングラデシュに近い、海寄りの地域に多く住んでいる。この地域はかつてアラカン王国があり、一時期はダッカの近くまで勢力を伸ばしており、ムスリムの王国、ムガル帝国などとの貿易もあり、王国の中にもムスリムが住んでいたともいわれている。この地域は、大英帝国のインド領の一部に最も早く組み込まれた。そのときにも今のバングラデシュのチッタゴン地域からミャンマーにムスリムの移動があったということが歴史家の研究で明らかにされている。第2次世界大戦中にイギリス側にムスリムが動員され、日本は当時ミャンマーを支配していたわけだが、アラカンの仏教徒を動員してコミュニティ同士の戦いが起こり、後に殺し合いにつながったことは注目に値する。

現在、キャンプには大量の難民がいる。バングラデシュ側の国境地域に大量のロヒンギャが逃れている状況にある。また、ロヒンギャは世界のいろいろな国に何千人、何万人規模で滞在している。

日本においても、最初の受け入れからかなり時間がたち、子どもが生まれたりして、聞くたびに人数が増えている。第三国定住もどうやらあるようで、徐々に増えている。ただ、それでもせいぜい400人である。私が調査を実施した当時は難民認定されているのは20人程度で、その他に70人くらいが人道的配慮に基づく在留特別許可という、難民ではないが在留許可を与える措置を受けていた。さらに20人ほどはまだ難民申請中で、難民認定も在

留特別許可も得ておらず、仮放免という非常に不安定な、移動や就労に制限のある状況に置かれていたが、2021年のクーデター以降、特別避難措置によって特定活動のビザを与えられている。

研究手法

私の研究では、17人の在日ロヒンギャ（男性15人、女性2人）に対してライフストーリー・インタビューを行い、最初はコミュニティのリーダーに会い、その後徐々にいろいろな人と仲良くなって違う人にも話を聞く形で調査を進めていった。ゲートキーパーにあまり頼り過ぎないようには一応心掛けていた。

ロヒンギャが国を逃れることになった理由

まず、ロヒンギャの迫害について特に重要なこととして、第2次世界大戦後、日本が立ち去った後にイギリスによる植民地支配を経て、ネ・ウィン政権という独裁政権が1962年から政権を握ったことがある。この政権は、1978年から1979年にナガミン作戦の名の下、アラカン州の北部マウンドー地区に住むムスリムの在留状態を確認するという名目で軍事的な作戦を実施する。だが、実際にはたくさんの人が殺され、家が焼かれ、レイプされたことが報告され、身分を証明するために必要な政府発行する様々な書類も破壊されたりして、約30万人のロヒンギャが国境を渡るという事件が起きる。後に帰還は可能になったが、帰りたくないというロヒンギャは、そのままパキスタンやサウジアラビアに移っていったといわれている。

さらに、1982年には国籍法が改正された。当時は135の土着民族（national races）があったとされ、ロヒンギャは前から無国籍だったともいわれるが、このとき初めて明確に無国籍になったと見た方が正確だとする研究もある。私の聞き取り調査でも、あのときから状況が悪くなった、IDカードが取り上げられたという話は出てきている。

ナガミン作戦では、実際に私がインタビューした2人のロヒンギャ男性も逃げてUNHCRのキャンプに避難しており、1年後に帰ると家は焼かれており、彼らはそのまま国内避難民としてヤンゴンに移動した。

さらに、1988年が非常に重要な年で、民主化を求める運動が起こり、私の聞き取りに参加してくれた4人も活動家としてこれに参加しているが、国内を逃げ回ってから国外にどんどん逃れていくわけである。タイ、バングラデシュ、あるいはそこからサウジアラビアに移動する人や、直接日本に行く人もいた。

もう一つ大量の難民が発生した事件として1991～1992年のピタヤ作戦がある。同じく不法滞在者を取り締まるという名目で、同様の軍事作戦が行われて、約20万人が国外に逃れた。1978年の経験もあり、帰還を躊躇する人が多くいる中、UNHCRが強引に帰還を進めたという批判もある。私の研究に参加してくれた人によると、1990年代から2000年代にかけて事情が悪くなり、さまざまな理由で徐々にタイに逃れたり、バングラデシュに逃げたり、タイに船で逃げてそこからマレーシアに行くといったことが起こった。私の研究では主にマレーシアに逃げていく人が多かった。

最近は情勢がどんどん悪化し「slow burning genocide（ゆっくりと進む大量虐殺）」と描写されたりもしてきたが、2012年以降、国内避難民キャンプへの攻撃が激化し、2014～2015

年にはボートピープルの問題が注目されるようになった。また、2016～2017年には状況が非常に悪くなり、2017年に国内で虐殺が起り、国外へ大量に人が追放されるに至った。2016年には、それを逃れた家族の呼び寄せで日本に来たという事例がある。

ロヒンギャはどのようにして日本に来たか

1988年世代をパイオニアと呼んでいる。それに対し、フォロワーは1990年代後半から2000年代に来た人たちで、完全に当てはまらない人もいるかもしれないが、いったんこのように分けてみた。パイオニアは、ほとんど日本について何も知らなかったのに対して、フォロワーの方は先にパイオニアがいたことで、自分たちも日本に行こうかという判断をしたり、あるいは呼び寄せられたりして日本に来ている。

まず、1988年世代について説明したい。この年、学生や住民による民主化を求める全国的なデモがあり、後にアウンサンスーチーが率いるNLDが1990年の総選挙に勝ってネ・ウィンが辞任するのだが、既に新しい軍事政権が政権を握っていて、アウンサンスーチーも自宅軟禁されていたりする。このデモに参加した人たちは取り締まりの対象となり、例えばAさんは、まずはマウンドーからヤンゴンに移動したが、やはり危ないと感じて、友人が手配してくれたブローカーにお金を払ってパスポートとチケットを手に入れ、1993年に直接日本に移動してきた。日本についてはほぼ知識がなく、難民条約に入っている民主的な国だというくらいの知識しかなかった。

Bさんも同じくマウンドーを逃げ回ってからヤンゴンに移るのだが、結局彼もこのままでは危険だと考え、まずタイに移動する。タイの国境のメーソートに少し滞在したが、タイにいれば強制送還の危険性もあるということで、バングラデシュに移動してもう一度ブローカーにお金を払い、サウジアラビアに移動して2年間滞在してビジネスもしていたそうである。しかし、彼はやはり政治的な活動をしたかった。当時日本の難民認定者は多くはなかったが、ミャンマーから逃れた難民が、東京の高田馬場を中心に積極的に政治的な活動を行っていた。彼はその活動を知って、直接コンタクトもあったので、日本に来ることにした。

もう1人のパイオニアのCさんは、まずバングラデシュに逃げて、本当はアメリカに行きたかったのだが、お金が足りず日本に行くことがわを決意する。

一方、フォロワーの方はどうかというと、パイオニアが既にコミュニティをつくっており、1990年代後半にまず難民申請していたロヒンギャ人道配慮で在留資格が与えられる事例が出てくる。その後、不認定処分となった別のロヒンギャの難民申請者は裁判で戦い、2000年代初めごろまでその裁判が続いており、裁判の判決が出る前に入管がそのロヒンギャ男性に対して難民認定を認めるという異例の事件が起きて、最初に難民認定されるロヒンギャが現れる。在留資格が与えられたロヒンギャは何人かその前にもいた。それを受けてマレーシアから日本に移動してくる人が現れた。マレーシアでUNHCRにロヒンギャのことを難民として認めてほしいと働きかけたロヒンギャ活動家があり、それが実現してUNHCRによるロヒンギャ難民の登録が始まるのだが、ロヒンギャの権利を求める活動家だった彼自身は目を付けられていて危ないと感じ、最初に難民認定されたロヒンギャ男性が知り合いだったので彼に連絡して、ブローカーを使って日本に移動した。ここでトランスナショナルなネットワーク、さらにブローカーが重要になってくるわけである。

入国も拒否され、危うく強制送還されそうになるが、彼は粘って頑張って居座って申請し、2 カ月後に認定される。その後を追うように他の人たちが同じブローカーを使って日本に来るルートが出来上がる。直接日本に来て難民申請を行ったロヒンギャの大多数は、このルートでマレーシアから日本に来ることになったのである。タイミング的に、2005 年に日本の法改正も行われて 60 日ルールが撤廃され、難民申請ができることになったというもう一つの事情もあるのかもしれない。

同時に国境管理が強化され、ブローカーが捕まり、2006 年のある時期からぴたと来ることができなくなってしまう。いわゆる国境の外部化、さらにブローカーの取り締まりやビザやパスポートの電子化も進んでいくわけだが、そういうものがやはり効果的だった。移動がうまくいかなかった事例には、マレーシアまでは行けたが、そこから家族がいるから、あるいはネットワークがあるから日本に行きたいということで、ブローカーを手配してタイ、中国、ベトナムから日本に行く予定だったのだが、ベトナムで「あなたはミャンマーの人どころかパキスタンとかアルカイダだろう。アフガニスタンの人ではないか」と言われて止められてしまう。何とかミャンマーの大使館に電話に出てもらい、ミャンマー語でしゃべってロヒンギャであることは一切しゃべらず、自分はビルマ人だということをアピールして、ベトナムの入管の人に信じてもらって、同時に国には帰りたくないから来た国に戻してくれと言って、中国に押し戻され、中国からマレーシアに戻り、マレーシアで収容されてしまって、友達がお金を払って収容所から出してくれたというものもある。

家族の統合の事例がある。ロヒンギャには世代を超えた難民がたくさんいて、私がインタビューした 1 人の女性は、マレーシアで生まれた無国籍の女性であった。彼女は無国籍 2 世、ロヒンギャ難民 2 世としてマレーシアに住んでいたが、日本に来て難民認定された男と結婚した。彼が日本で難民認定されて家族の呼び寄せができるようになり、1 年ほどの短い期間で小さい息子と一緒に日本に来ることもできた。また、2016 年に国内の事情が非常に悪化したときに、親や妹が国境を越えて逃げた在日ロヒンギャの男性がいたのだが、彼も家族を呼び寄せることができた。

まとめ

日本はパイオニアにおいて、多くの場合一番目の選択肢ではなかったが、限られた選択肢の中から選べる国だったといえる。また、ネットワークやブローカーを使って通過国を乗り切って日本に来ることができた人がいたということは確認できたが、国境の外部化・厳格化がなされていくと来ることのできない理由がどんどん作られていき、大量にロヒンギャ難民が出ているにもかかわらず、今はもう来られない事態になっている。

もう一つ、私の研究では、歴史的な事情や政治的事情を考察することが大事だと思う。日本のミャンマーに対する ODA はかなり多いと昔からいわれており、1988 年から、一時期打ち切ったのに 1989 年にはまた ODA を払い始めたり、より最近では麻生太郎がミン・アウン・フラインという独裁者から勲章を受けたりしていて、虐殺が続いている間でも日本がミャンマーと近い関係を保っているというのは、やはりある程度責任があるのではないかと考えている。

(上水流) 本当に一人一人インタビューに基づいた緻密な報告を頂戴した。この後、討

論の時間があるので、簡単な事実確認等に関わるようなご質問があれば受け付けたいと思うが、いかがだろうか。

質問は無いようなので、それでは、時間も押していることから、発表に関しては以上とさせていただきます。ここで休憩を挟みたい。開始は 16 時 40 分からで、最初に神戸大学の下條さんからコメントを頂き、それを受けてリプライしていただいた後、フロアからもご質問を頂戴したいと思います。

コ メ ン ト

下條 尚志氏（神戸大学）

（上水流） それでは、コメントと討議に入りたい。最初に神戸大学の下條さんからコメントを頂戴する。

（下條） 今日は非常にマクロなレベルの話と非常にミクロなレベルの話が混在していて、どうコメントすべきか難しいと思いながら聞いていた。考えがまとまっていないが、簡単にコメントさせて頂きたい。

私自身は、ベトナム南部に暮らしているカンボジア系（クメール系）の人たちが多い村で長年調査をしてきた。そこで彼らがボートピープルやランドピープル（陸地の国境を越えて第三国へ移住する人びと）として難民として出ていく話を聞いた。最近ではカンボジアでも調査をしており、1975 年、1979 年といろいろなタイミングで人の移動が起こっており、それがどのように起こったかについてもいろいろとインタビューしてきたので、今日の話は非常に興味深く拝聴した。

昨年、私は今村真央さんと一緒にロサンゼルス近郊で調査らしきものをした。先ほど Ken さんの話にもあったロングビーチ、世界最大のカンボジア難民コミュニティのある場所で、街中で面白いストリート・ペインティングが建物の壁に描かれていた。それらは、ラオス系のカンボジア人で、ポルポト政権期を経てタイの難民キャンプに逃げ、そこからアメリカに逃げた人が描いたストリート・ペインティングなのだが、その人にも難民としてどのようにアメリカへ移住したのかについて話を聞くことができた。

Ken さんの話の中でも、難民が非常に simplification され、hypervisible にされるという話があったが、なるほどと思った。例えば、ロングビーチの辺りに私が調査してきたベトナムのクメール系の人たちのお寺がある。ベトナム出身のクメール系の人、カンブチア・クロオム（下方のクメール）と呼ばれる。かれらは、ベトナム出身であるがロングビーチのカンボジアのコミュニティのなかで割と中心部にお寺を建てていろいろな活動をしている。だから一口にベトナム難民、カンボジア難民といっても、先ほどのアーティストの話もそうだが、民族的にはとても複雑なのである。そうした点が、日本やアメリカに移住した瞬間に、ベトナム難民、カンボジア難民とものすごくシンプルに描かれてしまうような気がする。

この写真は、全米最大のベトナム人街のリトル・サイゴンである。リトル・サイゴンは、

ロサンゼルス近郊のガーデン・グローブにある。最初にベトナム難民が移住したときに建てられた大型ショッピングモールがある。これを建てた男性はベトナム北部出身の華人で1954年南北分断時に南ベトナムへ移住し、さらにアメリカへ難民として逃れた人（Frank Jao/Trieu Nhu Phat）だった。ベトナム難民といっても中国系の人も結構いる。ハリウッド映画「グーニーズ」に出てくるアジア系の男の子も確か華人系のベトナム難民（Ky Huy Quan）だったはずだ。難民といっても非常に複雑な背景を背負っており、しかもリトル・サイゴンには最近2000年代や2010年代にやってきた難民ではない立場にあるベトナム移民の人もかなりいる。

ガーデン・グローブにはベトナム戦争の慰霊塔がある。そこを訪れた際に面白い話があった。この慰霊塔は、写真のとおり右側が南ベトナム兵で左側がアメリカ兵であると思われるそして旧南ベトナムの国旗が立っている。ベトナム戦争のことを記念しているのかと思いきや、石碑に書かれているのは、1974年、南ベトナムが崩壊する直前に中国が南シナ海の南沙諸島、西沙諸島を占領した、そのときに戦闘で亡くなった南ベトナム兵の名前が数多く刻まれていた。こうした慰霊塔で表象されていることは興味深いことに、今のベトナム政府の見解とも一致している。どうして元々イデオロギーが逆だった旧南ベトナムの人たちと今のベトナム共産党政府の人たちが、南シナ海の問題を巡って意見が一致するのか。

私がこの慰霊塔の辺りをうろうろしていると、60代くらいのベトナム系のおじいちゃんがやってきて、いきなりベトナム語で話しかけてきた。そのときに彼が一枚の写真を私に見せてくれた。彼はベトナム中部のクアンナム出身なのだが、その写真は、ベトナム戦争で空爆にあったときに防空壕に逃げているときの写真だった。アメリカの空爆があったときに逃げた防空壕の写真で、今ウクライナとロシアが戦争しているが、ベトナムみたいになるから、もうアメリカは干渉しない方がいいということを散々強調していた。話を終えたあと、彼はプロテスタント系の教会へ向かっていったのだが、話を聞きながら、難民と呼ばれる人たちが民族的にも、宗教的にも、思想的にもいかに複雑かということを痛感した。でも、それが難民という言葉でものすごく simplification されてしまうのである。

話がかかなりずれてしまっていて、どう今日の話をまとめたらいいいのか思い付かなかったのだが、最近、私は学部生に文化人類学を教えていて、初めの方に文化相対主義の話をよくする。そうすると、「移民がやってきて異文化が入ってくると、自文化が衰退する恐れがある」とコメントする学生がものすごく多い。そして次に彼らが話すことは大体決まっていて、「日本は単一民族国家で外からの影響を全く受けてこなかった。最近になって多文化共生を打ち出して新たな移民を受け入れなければいけないと思いつつ、自文化が失われるのは恐ろしい」と考える。ここには面白い考えが潜んでいる。今の若い学生たちは多文化共生という教育を小学校のときからずっと受けていて、それは理解可能だし、異文化の価値を対等に認めるという考え方を受け入れることは可能だ、少なくとも部分的に理解可能だ。たとえものすごくナショナリスティックな考えを持っていたとしても、異文化が存在しているという前提は受け入れ可能で、しかしそれでも、やはり自文化中心主義的な本質的なエッセンシャルな日本文化が存在するという考え方には強くこだわっているような気がするのである。

昔、「自文化中心主義的な相対主義」と人類学者の浜本満先生が論文で書いていた。学生

に文化相対主義に関する意見を聞いてみると「文化相対主義と自文化中心主義は対立するものだ」と言うのだが、学生が多文化共生という思想を受け入れているのを聞くと、実は文化相対主義と自文化中心主義は対立せず、併存、混在しているような感じがする。不思議だなと思って、浜本先生の「自文化中心主義的な相対主義」という言葉を思い出したのである。日本は特に第2次世界大戦以後、「日本は太古からずっと単一民族国家だった」というイデオロギーがより強化されたといわれている。特に台湾、韓国、朝鮮半島、満洲、サハリン、沖縄を失った後、そうした単一民族国家説がむしろより強化されたのではないかという社会学者もいるくらいである。

この日本の単一民族国家神話は、先ほど今村さんがおっしゃっていた民族型ナショナリズムの一種だと思う。東アジアでは、韓国も含めて単一民族国家神話が非常に強くあり、一方でアメリカは先ほどの今村さんの分類によると市民型ナショナリズムの国である。市民型ナショナリズムのアメリカと民族型ナショナリズムの日本とでは、国民統合の仕方が大きく異なっているにもかかわらず、現在の状況を考えると文化相対主義、自文化中心主義が併存している状況は酷似している。つまり、異文化が存在している、それも対等だということは認めるが、自文化が脅かされることだけは許せないという考え方である。

難民（移民）を受け入れる社会や国家は、異文化に対しても自文化に対してもものすごく単純化して捉えているし、両者を過度に可視化しようとしているようにも思える。その結果、かえって見えなくなっているものがたくさんあるような気がする。それによって、難民の民族的・宗教的な多様性や、個々人が持っている政治思想や、個々人の経験は見えなくなり、過度に simplification されているように思えるのである。

本日の発表は、特に難民1世、2世、3世が日本社会の中に適応していく過程を論じたものが多数であった。国民統合と多文化共生の間のグレー部分が居心地の良さを生み出すという意見はすごく示唆的で、落合さん、野上さんの発表の主張にもかなり重なるところはあると思ったが、もう少し巨視的な視点から詳しくそれぞれにご意見を伺いたいと思った。

スティーブンさんには、先ほど個人的にご出身がオーストラリアだとお聞きした。なので、東アジア、東南アジアでたらい回しにされてきたロヒンギャ難民について、例えばオーストラリアやアメリカとの国境管理の問題と比較したときに、どのようなことが言えるか伺いたい。また、統合・共生・包摂・排除という点について、アメリカやオーストラリアと比べて、日本の難民を巡る政治や社会の風潮をそれぞれの発表者はどのように捉えているのか、先ほどの部分と重なるが、もう少し伺いたいと思っている。質問はそれぞれ一つずつで、ざっくりとしたコメントでまとまっていなくて恐縮だが、お答えいただければ幸いである。

（上水流） それぞれの発表について考えさせられるコメントを頂戴した。それでは、発表者の皆さまに前に来ていただき、コメントに答えていただきたい。

リ プ ラ イ

(上水流) 準備ができたので、まず第2部の発表者の方から、下條さんから頂いたコメントにコンパクトに回答ください。まず落合さんからリプライをお願いする。

(落合) 質問は、グレーな部分の居心地の良さ、統合と共生のグレーな部分を巨視的にどのように捉えるかというご質問だったと思う。私の発表におけるベトナム難民2世の姿は1世と日本社会の間の仲介者としての2世という位置付けで simplification しているわけだが、これを複言語主義の考え方から考えてみたい。一つの社会の中に多数の文化がある状態を多文化といい、一つの社会の中にたくさんの言語が共存している状態を多言語という。だが、複言語というのは、多様な人が共に暮らすことによって一人の人間の中に多数の言語があり、言語は文化とひも付いているものなので、複数の言語・文化が一人の人間の中にある状態をいう。移民2世はルーツの文化・言語とホスト社会の文化・言語を自分の中に複数持っているのだが、彼らだけではなくて周りのホスト社会の子どもたちも移民2世と付き合うことで多言語を身の内に取り入れていくという議論がある。

私は、言語だけではなくて文化に関してもそうやってみんなが交渉しながら、言語については私語(わたしご)、文化については私文化(わたしぶんか)という形で一人一人全く違う混ざり方をしているのではないか。親の教育方針などでバイリンガルと一言で今言えなくなってきてしまっていて、多様な私語(わたしご)を持って、少しでも自分の中にある言語資源を有効に活用してコミュニケーションを取っていけばいいのだという意見もある。昔のように、ネイティブ並みに4技能全部できるようになればそれは彼の言葉なのだと認めていく方向の議論もある。

私は2世の子どもたちの母語・継承語教育の教室の中でしか見ていないが、見てみると、みんな全然違う。ベトナム語をどのように身の内に取り入れているか、あるいは日本語をどのように構築しているかは本当に一人一人違って、私語(わたしご)を作っている。逆に、その隣で、すごくベトナム語に興味を持っている日本の子どもたちは、友達から聞いて詳しくなったりもする。そのようにして、難民2世だけでなくその周辺で育つ子どもたちも交渉しながら私語(わたしご)を作っていくというところに、仲介者としての素養を得ていくのではないかと思う。

どうして継承語を日本の公教育の中でやるのかという議論もあるが、EUでは移民の言葉を学ぶことによって、全ての人がいろいろな複数の言語を学ぶことによって文化の対立を調停する力を磨くために、その国の言葉と移民の言葉を学んでいこうという姿勢が打ち出されている。

私が思う仲介者としての2世の力というのは単純に1世と日本社会をつなぐのではなく、さまざまな異なりを身の内に持つ移民2世が複言語・複文化の異なり、対立の中で落としどころを探っていく力を本人も得ているし、周りにも示唆していく存在になっているのではないかというのが下條さんへの私なりの回答である。

(上水流) 続いて乾さん、統合と多文化共生の間のグレーな部分という枠組みを出していただいたが、統合というのが仮に日本社会により吸収されるような形、日本人との同一性を確保していく方向だとする。一方で多文化共生は、それぞれの文化が区別に存在して、複数の文化が同居するから「共生」ということになる。すなわち、それぞれの文化がある

ことによって共生が成り立つと考えられるが、その両方があるような在り方が良いという話を乾さんはされたと理解したのだが、そういう理解が正しいかも含めて、先ほどの下條さんのコメントについてリプライをお願いします。

(乾) キーワードは排除、統合、そして多文化共生とあったが、インドシナ難民に関して私たちがアメリカと違うのは、私たちは顔がすごく似ている。アメリカだと顔が全然違うので、「難民か」とすぐ分かると思うが、ラオスやベトナムだとすごく似ているから分からない場合もある。なので、1990年初めなどは同化しようというコンセプトがすごくあったのだと思う。1.5世が学校にいた頃は、多文化共生や国際理解という言葉はなく、区別すると逆に差別になるという考え方もあったので、あえて同化する方針を立てたと言っていたが、それは日本の特色だと思う。アメリカではアジア系がいれば難民だと思うが、日本であれば彼らがうまく日本人になってくれるのではないかという甘い考えがあったのだと思う。だから、同化や排除という言葉があったと思うが、時間がたつにつれて、これは失敗だったと気がついたのだろう。ほとんどの難民の子どもたち、特に兵庫県の子どもたちは高校に進学できなかったり、高卒でも貴重な人材で、大体中卒で、犯罪に巻き込まれたりしてなかなか男の子には会えない。「どうして男の子に会えないの？」と聞くと、「みんな鑑別所にいるから会えないのだ」と言われたり、結婚しても離婚したり、やはりきちんと教育を受けられず、中卒の子が工場でどんどん働いているということが分かり、日本の政策は失敗したのだと私は思っている。

だから、難民の受け入れというのは基盤や準備がないと絶対にやってはいけないとインドシナ難民の例を見ていて思うのだが、失敗したからこそ、方向転換して統合や多文化共生という言い方が出てきて、インドシナ難民も見えないものにふたをするような感じだったが、見えないものを可視化しないと問題は見えてこないということに気付いたのではないと思う。

教育に関していうと、私は1.5世の教育、2世、3世と見ているのだが、今までは高校にも行けないような状況だったのを、今は兵庫県も含めていろいろな他府県が、外国にルーツを持つ子どもたちに高校の教育機会を与えるよう特別枠を作っている。同化でも排除でもいけない、教育の機会を与えることが多文化共生につながるという流れができてきていると感じている。今までインドシナ難民を見えない形で扱ってきたが、やはり可視化して問題化してきたことで、日本政府のインドシナ難民の教育に関する失敗を何らかの方法で補償していかないといけないところがたくさん出てきている。多文化共生の政策の方向に向いていることについては非常に期待している。

(上水流) 続いて、スティーブンさんに発言をお願いしたい。ロヒンギャの場合は、先ほどの simplification にしても可視化についても日本社会ではなかなかできていない。認識さえなされていないような状況だと思うが、その点も踏まえてリプライをお願いしたい。

(スティーブン) まず、たらい回しにされたロヒンギャ難民へのオーストラリアやアメリカの対応と日本を比べて検討できないかという話だが、やはりたらい回しにされて大量にボートピープルが発生していたときに、日本やオーストラリアは富裕な国で建前だった

としても民主主義国家で難民条約も批准していたにもかかわらず、そして、ミャンマーからは距離的に比較的近い国だったにも関わらず、オーストラリアの首相は一切受け入れないと言い、日本政府の対応は覚えていないが、積極的ではなかったと言っていいだろう。受け入れ人数を見ただけでも積極的でなかったことは明らかなだ。

直接難民に来てほしくないというのはどの国も共通だと思う。難民の研究者は特にオーストラリアとアメリカに着目して、フィッツジェラルドという学者などは、アメリカとオーストラリアの対応は、国際社会において難民をキャンプに閉じ込めておいて、そこから自分たちが欲しい難民だけを、例えば英語ができる難民や教育水準が高い人からどんどん選んでいくようなやり方がなされていると指摘する。障害があったりすると、いつまでも移動できないこともあるようだ。だから非常に選別的で、結局これは難民の受け入れなのか移民制度なのかとなる。そして、安倍晋三元首相が移民と難民を言い間違えるというようなことが起きるのである。でも、それは第三国定住において難民の受け入れ方が完全にその国の都合に合わせた移民政策に見えるからなのかもしれない。

しかし、日本の場合は他国の第三国定住と同じようなことをしようとしても、うまくいっていない。定住させた難民をキノコの栽培等をさせようとして田舎に住まわせて、それを経験したカレン人が逃げ出した事件などもあり、それで日本の評判が悪くなって日本に行かない方が良いということもあったようだ。だから、日本の第三国定住はこれまでの日本政府のやり方では、うまくいかなかったわけだが、移民を受け入れたくてもなかなか受け入れられない日本みたいなところはあると思う。また、量的な違いは確かにあるだろう。アメリカは大量に受け入れているが、でもやはり選別したい。オーストラリアも日本よりは多いと思う。

これは、それこそ Ken さんの話にもつながると思うのだが、難民にも主体性があり、自分たちが移動したい国や行きたいところがあるはずなのだが、多くの場合は「おまえたちは難民キャンプに入っておけ」と大多数の難民は倉庫にぶち込まれて、「ここでおとなしく順番を待って、もし宝くじに当たれば来られるかもしれないが、当たらなかったら残念だったね」というように、結局は国家の選ぶ権利が優先されているのではないかと思う。

ロヒンギャにおいてはいろいろな努力がされていて、すごく人数も少ないが、それこそ敬虔なムスリムでハラール食にも、そんなにこだわるのかというぐらいこだわる。だから、例えば、給食に代替するお弁当を作っていいかと学校側に働きかけた家族がいた。その後、学校側も対応してくれて、ベジタリアン食の選択肢を給食で提供するようになった。それは、ロヒンギャの学生が増えたことを受けて、彼らも同じ給食をみんなと一緒に食べられるようにして、同時に彼らの宗教的な心情が尊重されるような対応をしたわけだ。また、お祈りができる部屋が用意されたこともあると聞いた。そういうローカルなつながりと地道なコミュニティとのやり取りで、彼らが日本になじめて、日本の中で日本らしい暮らしもしながら自分たちの文化も保てる、それこそ共存事例も見られると思うのである。

同時に今、私は実はクルドの研究もしているのだが、今日もひどい排外主義のデモがあった。アメリカなどはトランプが勝ってしまって、より移民を排斥する方に向かっている。ただ、バイデンやオバマもたくさんの移民を強制送還して、*deporter in chief* と呼ばれていたくらいなので、こうした問題はずっと起きている。日本でも、少ないのに目立つからかもしれないが、クルド人に対する排外主義は爆発している。本当に 2000~3000 人くらいの

少ない人に対してこんなにヘイトが高まっている。オーストラリアでも以前からポートピアールに対する「機関銃を向けて撃ってしまえばいいのだ」という考えを持っている人はいた。

以前からジグムント・バウマンなどの社会学者が言っているが、グローバル化でコントロールできない資本の移動などによって人々の生活が苦しくなって、それこそネオリベラルな時代で、その不満に全く対応できないような政治がずっと行われている中で、ヘイトの矛先のすり替えが起きているのではないかと思う。そこは共通するのではないかと思うたりしている。

(上水流) 3名の方、リプライいただきました。それでは、MacLean さんをお願いしたいのだが、三つの発表、日本のシビアな状況もご覧になられた上で、改めてアメリカと日本を考えながら下條さんのコメントについてリプライをお願いします。

(MacLean) It's a bit ironic—I'm an anthropologist and typically focus on the micro level, yet my talk today was on the macro. Still, I'll try my best and continue speaking from a macro perspective to draw a useful comparison.

As an anthropologist, I believe identity categories—like Japanese, Korean, American—and racial categories such as White, Asian, and so on, are social constructions. Because they are socially constructed, they have histories and can change over time.

Let me give you an example: the category of "White people" in the United States. Historically, that category only included White Anglo-Saxon Protestants. Italians weren't considered White. Neither were the Irish. Jews weren't considered White either—and to some extent, we still aren't considered fully White.

Over time, however, the category of whiteness in the U.S. expanded to include Italians, Irish, and others. One major reason for this shift was the persistent racism directed toward those seen as even more "non-White," such as African Americans, Asians, and Hispanics.

While racism itself is not new—it has existed for as long as humanity—what we're witnessing now is a resurgence of ethnonationalism. More precisely, it's a form of racial nationalism in the United States, predominantly for White people. The message is essentially: "You must assimilate and become like us or leave." It's a form of Christian nationalism.

A central fear that drives this ideology is something called "replacement theory"—the belief that unless America becomes more White and more Christian, people from around the world will replace White Americans and the country will cease to be "American."

People who hold these views tend to be deeply hostile to multiculturalism, which they perceive as a threat to their identity and existence. And this isn't limited to the United States—it's a major concern across Europe today, and while Japan may not face the same issue now, it could become relevant 100 years from now.

This brings me to a question—one I ask with humility and curiosity, acknowledging my ignorance. How has Japan's experience been with Koreans living in the country? Does that experience offer any lessons—positive or negative—about assimilation, integration, or societal attitudes?

Could Japan's experience with Koreans serve as a reference point when considering how to engage with future refugees and immigrants, especially if their numbers grow?

That's my final point for now. I offer it as a question for my Japanese colleagues—not just to draw from the American experience, but to also reflect on what might be learned from Japan's own history.

質 疑 応 答

(上水流) 逆に今、MacLeanさんから質問が来たので、その回答をしたいと考える。韓国専門家の神戸大学の岡田さんに回答を一番期待したいところだが、彼は本日参加していないので、回答は別の方をお願いするということにしたい。その回答の前に、時間もあと15～16分しか残っていないので、フロアやオンラインで参加している方からご質問があれば先にお受けしたい。

(フロア A) インドシナの方たちの難民の定着過程ということで大変勉強になった。中でも非常に脅威を感じたのが教育の問題である。多くの方たちが高校に行っていない、そして犯罪の方に走っているということで、その方々の中からもう少し政府に対して支援を求めたり、支援者の方からこのようにした方がいいのではないかというアドボカシー的な働きかけはあったのかどうか。インドシナ難民の定着に関して、特に第2世代の教育について失敗したという認識を政府は持っているのかどうか、分かる範囲で教えてほしい。

(乾) ラオスの方を見る限り、なかなか厳しい状況である。ただ、本人からは「こうして欲しかった」というのは聞くが「これからこうして欲しい」というのは全然出てこないのがまた問題だと思っている。例えば「もっと私が賢かったら、日本でもう少しいい仕事に就けたと思う」と言うのだが、どうだろうか。自分たちが「もうちょっとこうしてほしい」ということはあるが「次の世代に向けて何をしてほしい」といったことが全然出てこない。そこまで考えるクリティカルシンキングが身に付いていない、全て受け入れるしかなかったという状況なのだと思う。

ただ、先生がおっしゃったような支援者はたくさんいて、本当にマクロレベルなのだが、先生方が放課後に残って自分たちにだけ教えてくれたとか、放課後教室というのはそのときに作られたのだが、土曜日の午後や放課後に難民の子どもたちを集めて、今も続いているのだが、そういう補習教室があるということで、そういうところから問題を吸い上げて、地方政府、例えば姫路だったら姫路市の教育委員会などに訴えて話を大きくしてもらって顕在化してもらったという流れがある。

最後の質問で、政府が失敗に気付いているかというのと、私は気付いていないと思う。インドシナ難民という、見えない難民、隠れた難民で、日本人とも全然見分けが付かない人たちの状況を把握しようとしてもできなかったし、今もしていないと思うので、伝わっていないのだ。私もボランティア教室を、インドシナ難民ではなくて今は外国人の子どもたち

にしていたり、いろいろな支援団体があるので、どんどん行政に来てもらって見てもらったりしているが、そういう動きを本当にボトムアップでやっていかないと政府はこれからも認めてくれないと思うので、私も微力ではあるが、現場の声をどんどん反映させて、先ほどお伝えしたように特別枠というのはだいぶ広がっているのもっともっと教育の機会を難民や外国ルーツの人たちに与えていくよう、研究者としては進めていきたいと思っている。

（上水流） 落合さんも少し関連すると思うのだが、もし付け加えるようなことがあればお願いしたい。

（落合） 2020年代になろうという時に文科省が、外国人の学習について初めて母語・継承語教育の重要性について言及した。それまでは、本当に「日本語支援」にのみ言及され、「日本人にする」という視点しかなく、外国ルーツであることを生かすという視点がなかった。文科省がやっと公式文書の中で母語・母文化教育の重要性に触れ、大阪府の枠校（日本語指導が必要な帰国生徒・外国人生徒入学者枠を持つ高校のこと現在8校）の中で母語・継承語での支援が行われている。また、枠校の研究も文科省の科学研究費で進められ、そこでどういう教育をし、子どもたちがしっかりと統合されるか、キャリア形成ができるかということについて、研究と実践が着手されている。

今追い風なのは、少子化で定員割れしている公立高校が出てきている。そういう中で、今まで全日制の公立高校はベトナムの子の入学率が改善の傾向が見えることだ。枠校の高校の先生たちがものすごく頑張って受け入れをしている、という研究発表も聞いた。少子化がいろいろな意味で外国ルーツの子どもたちの統合の追い風にはなっていくのではないかと期待する。

Kenさんが先ほど質問された在日コリアンの経験と難民受け入れのことと少し絡めて言わせていただくと、今ベトナムの子たちが神戸で在日コリアンの試みからいろいろなことを学んでいる。在日コリアンがどのように自分たちの継承語を学校の中で守って、それを国際理解教育・人権教育の場で学校の子たちに伝えていくことなどを参考にしてベトナムの子たちも学校で国際理解教育・人権教育の場で協働関係をつくったりしている。しかし、行政から降りてくる様々な支援から在日コリアンのことは除かれてしまう。オールドカマーはもうちゃんと自立しているから除外してという感じで、例えば兵庫県で母語センターがベトナム語とスペイン語とポルトガル語でできたときも、一緒にずっと活動していた在日コリアンの人たちについては「彼らはもう自立している」といってナチュラルに除外する。これは兵庫県の事例なのだが、私は在日コリアンの経験はものすごく大事な私たちの資源だと思う。なのに、それを認識せずにいる日本の教育行政に大きな問題を感じている。

今、クルドの人たちにもものすごいヘイトスピーチが起こっているという話をされていたが、その同じメンバーが少し前まで在日コリアンに対してヘイトスピーチをしていた。在特会の同じメンバーがスライドしていつているという現状がある。ヘイトスピーチへのカウンターも在日コリアンの当事者やその支援者がスライドしている。そういう意味で差別と戦うテクニックを共有してくれた在日コリアンコミュニティはものすごく大きく私たちの社会に貢献をしている。外国人だから分かる日本の問題点を指摘しているという資源だ

けを私たちは頂いている。ただ、その資源を認識できていない政府と私たちの問題だと私は考えている。

(上水流) MacLean さんの質問にも答えていただきありがたい。私は、日本政府は在日コリアンの経験から何も学んでいないのではないかなと言おうと思っていたが、その理解とは異なる側面も落合さんにはお話しいただいた。教育の問題をご質問いただいた方、このような回答でよろしいか。

(フロア A) どこかでデータを入手できればいいなと思っているので、引き続きよろしく願います。

(上水流) 残り時間があと 5〜6 分だが、フロアやオンライン参加の方から何かあるだろうか。

(フロア B) 今の小川先生のお話と関連して、乾先生のお話で神奈川との比較が出ていて、そこにいろいろなものがあつたと言及されていて、乾先生のご発表は比較の視点が多重に入っていてとても長いスパンで見ている一方で、アメリカでのご経験や日本国内での比較などもされていてとても刺激的だったのだが、神奈川でそれがあつたということの背景をもしご存じであれば教えてほしい。

もう一つ、落合先生の先ほどの多言語と複言語の違いである。複も多もという形で受け取ったが、とても参考になるご意見だと思った。

(上水流) コメントが一つ、質問が一つだったかと思う。乾さんから回答をお願いします。

(乾) 私も神奈川と姫路と比較して、神奈川はすごく成功していると思ったので、なぜなのだろうと思って実際に行ってみてインタビューしたりアンケートしたりしているのだが、やはり人数が多かったことが一番大きかったと思う。レジュメにも書いたが、姫路で修了したのが 439 人で、大和だと 857 人で割と大きなコミュニティが形成されたのと、大和ではカンボジア、ラオス、ベトナム全員受け入れているので、もうインドシナ難民を包括的に受け入れる制度ができていたというのが一番大きい。また、姫路は田舎であり、あまり受け入れる下地がなかったことと、住民から反対を受けても定住センターをそこに置いたこともあり、その辺りの土地の関係と人数の関係があつたこと、神奈川は異文化を受け入れる下地が昔からあつた。港町である横浜の文化がすごく浸透しているのではないかとはいっていた。

総括すると、人数という条件で、コミュニティをつくりやすかったのだと思う。ラオスは本当に小さいコミュニティなので、本当に孤立した姫路の人たちでなかなか支援を受けることも難しかったことと、受け入れの下地、土地柄というこのものもすごく関連していると思った。

(上水流) 終了時間まであと 2 分くらいだが、もし発表者、コメンテーターで何か最後

に一言あれば最大1分くらいで話してほしい。

(スティーブン) ロヒンギャ難民の事例から、これほど迫害されているにもかかわらず、なかなか日本でも認定されなかったというのが一つ重要なポイントで、その中でブローカーや賄賂の話をしたが、偽造パスポートを作り賄賂を払い、さらにお金を払ってブローカーを使って来日してきた人で不法滞在者とみなされ、難民申請者として長年認められなかったロヒンギャ難民もかなりいた。偽装難民や不法滞在者だから難民ではないというのはやめてほしいし、むしろ偽造パスポートを作らざるを得ない人の方が難民該当性が高い場合もあるのだ。これが言いたいことの一つ。もう一つは、移民と難民のグレーゾーンがあって、経済的な理由で移動する人たちの権利はもっと考えなければいけない課題なのではないかというのが私の意見である。

(上水流) 国境管理が厳しくなり、偽物のパスポートを使えなくなってというスティーブンさんの意見は、本当に重要な指摘だと思いながら聞いた。

ちょうど時間になったので、ここで終わりたい。今回いろいろお話が出たが、例えば高校生や大学生である時の就職活動のときにベトナム人であることが評価されたという話があった。この事例からは、自国の経済的な発展と日本との関わりも日本社会におけるマイノリティのあり方に影響すると考えた。また、今日は議論としては展開しなかったが、宗教が大きな影響を与えていたのではないかというお話も出てきたと思う。これらも含めて、今後さらに議論を深めていける要素があると考えます。今回は当事者たちに注目して非常にミクロな形で報告をしていただいたが、今日、下條さんのコメントであったように、では一緒に暮らしている日本側はどうかということ、多文化共生というのは表面的には受け入れているが、自文化中心主義的なものはやはりすごく強固にあるという現状があり、そこはなかなか乗り越えられないという状況がある。

今後はマイノリティの周囲に暮らしている日本側の人たちがどのように彼らとコミュニケーションを取っているのか、取っていないのか、彼らの存在を認識しているのか、していないのか、さらにはどのように彼らと暮らしているのかということも含めて考えていく必要がある。そういう意味では、今日のシンポジウムは狙いとしてはもちろんミクロなところを見ていきたいということで、マイノリティ側からは議論できたが、日本人側がなく、議論すべき半分だけというような状況だと正直思っている。もう一つ側の日本の人たちとのコミュニケーションの中で何がどう生まれているのかということをもさらに分析し考えていくことが必要だと私自身は、本日のシンポジウムを終えて痛感した。

EES 神戸では、これからも様々なシンポジウムや研究会を実施する予定である。今後もぜひ皆様にご参加いただき、いろいろと刺激をわれわれに与えていただければと思う。

本日は基調講演の MacLean さん、発表者の3名の方、コメントを行っていただいた2名の方、加えて、英語と日本の同時通訳があるハイブリッド配信という大変な会場設定にご尽力いただいた鈴木さん、富田さんに、心から御礼申し上げます。おかげさまで無事に終わることができた。以上をもって本日のシンポジウムを終了したい。

発表資料

- * 基調講演の資料は著作権の関係からありません。
- * * 人権保護の観点から発表時の資料と一部異なるものもあります。

シンポジウム

越境・国家・生活世界

インドシナ難民からミャンマー難民までの50年

趣旨説明

県立広島大学 上水流久彦

1

趣旨説明

(1) 本シンポジウムの動機 インドシナ難民の発生から約50年

①時間的变化 母国や受け入れ国の政治的経済的状況
新しい世代の誕生



難民を取り巻く環境の複雑化・個別化

②情報機器の発達⇒国境を越えたネットワークやコミュニケーション日常化



国民国家の枠組みに収斂されない難民の姿

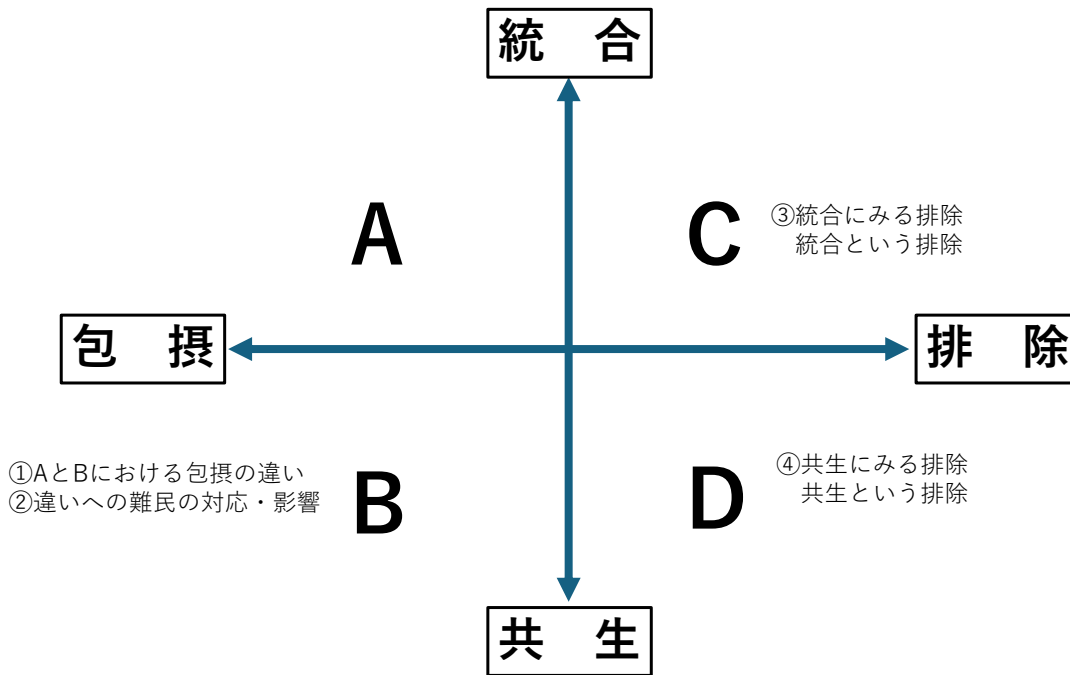
③2021年以降の政情不安による多くのミャンマー難民（ロヒャンギを含む）

(2) 問い

①時間軸の変化と空間的拡大に基づく彼らの一枚岩的ではない多様な姿への接近
(直面する／してきた困難やその乗り越え・格闘、新たな環境への適応)

②「国民統合」や「多文化共生」の批判的検証→それらに回収されない社会のあり方の模索

2



3

プログラム

第一部 基調講演 Ken MacLean(Clark University)

Southeast Asian Refugees in the United States: From Bureaucratic Representations

of Them to Cultural Representations by Them

コメント 今村真央 (山形大学)

第二部 日本社会に生きるということ 日本社会を越えて生きるということ

1. 落合知子 (摂南大学) ・ 野上恵美 (武庫川女子大学)

ベトナム難民2世の定着をめぐって—教育と介護の視点から

2. 乾美紀 (兵庫県立大学)

ラオス難民定住の軌跡—葛藤と楽観性の狭間で

3. マキンタヤ スティーブン・パトリック (一橋大学大学院)

国民国家による排除の被害者はどこへ行くのか？—ロヒンギャ難民・移民の移動経路と来日の経験から考える日本社会のミャンマー難民

討論 コメント 下條尚志 (神戸大学)

4

ベトナム難民2世の定着をめぐって ー教育と介護の視点からー

教育編

摂南大学 落合知子
(専門:母語・継承語教育)

1

日本全体でのベトナム
難民定住許可数 8,656人
日本のベトナム系住民: 50万人
神戸市のベトナム系住民: 8,762人

2

多様な背景の
ベトナム系住民が
出会う
公立小学校

神戸市立甲小学校 の母語教室

歴代母語教室の参加生70名中
難民ルーツの子は8名

(表) 2006～24年度まで甲小学校の母語教室に在籍した子どもたちの多様性

小学校在籍年度	個人識別
2006	1
2006～2008	6 5 4 3 2
2006～2009	9 8 7
2006～2010	13 12 11 10
2006～2011	18 17 16 15 14
2007～2012	19
2008～2013	
2009～2014	26 25 24 23 22 21 20
2010～2015	28 27
2011～2016	33 32 31 30 29
2012～2017	37 36 35 34
2013～2018	39 38
2014～2019	46 45 44 43 42 41 40
2015～2020	48 47
2016～2021	50 49
2017～2022	53 52 51
2018～2023	55 54 56
2019	61 60 59 58 57
2020	62
2021	64 63
2022	65
2023	68 66 67
2024	70 69

囲み字が女子

青が日本生まれのバイリンガル

赤がニューカマ

3

私とベトナムにつながる子どもたち

①神戸市立の甲小学校母語教室

(県事業→市事業)

2006～2011 見学者

2011～2015 サポート教員

2016～現在 ボランティア

毎週金曜放課後に高学年40分低学年40分

②近隣NPOの母語母文化教室にも参加

4

（表）2006～24年度まで甲小学校の母語教室に在籍した子どもたちの多様性

小学校在籍年度	個人識別
2006	1
2006～2008	6 5 B 3 2
2006～2009	9 8 7
2006～2010	13 12 11 A
2006～2011	18 17 16 15 14
2007～2012	19
2008～2013	
2009～2014	26 25 24 C 22 21 20
2010～2015	28 27
2011～2016	33 32 31 30 29
2012～2017	37 36 35 34
2013～2018	39 38
2014～2019	46 45 44 43 42 41 40
2015～2020	48 47
2016～2021	50 49
2017～2022	53 52 51
2018～2023	55 54 56
2019	61 60 59 58 57
2020	63
2021	64 63
2022	65
2023	68 66 67
2024	70 69

図み字が女子
青が日本生まれのバイリンガル
赤がニューカマー

（調査概要）

2020年当時18歳から24歳だった3名のベトナム人青年のインタビューの語りを1つの話題について1枚合計55枚のカードにまとめ、KJ法(川喜田, 1967・1996)によって分類し、「ベトナム語学習動機の低下(33枚のカード)」「ベトナム語学習動機の高揚(22枚のカード)」の大テーマを設定した。

B・Cへのインタビューは2020年に実施した。またAに対して行った2021年のインタビューとBに対して行った2018年のインタビュー(各1時間)も分析対象としている。

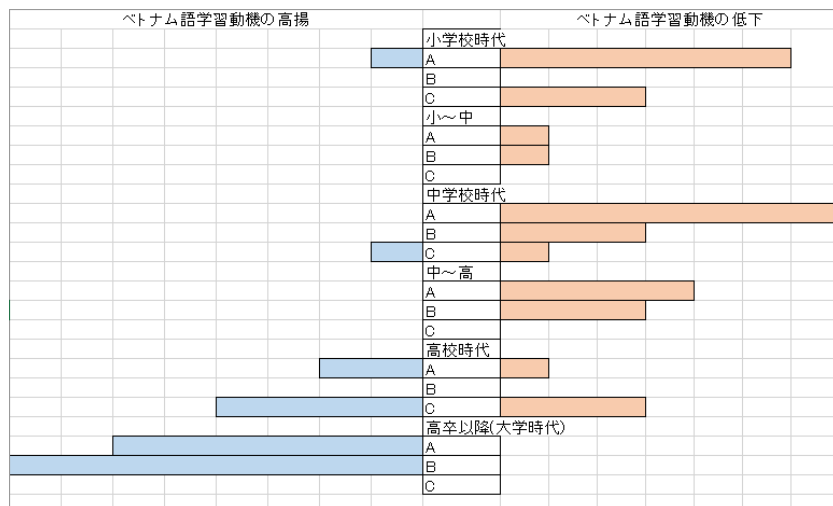
今回の発表のために2024年8月にBへのインタビューも実施

調査対象者のプロフィール（2020年当時）

話者	年齢（2020年当時） 来日年齢	ベトナム語習得状況	学歴・進路
A（女性）	22歳 小2来日	家庭言語 小学校で母語教室	大4（2021年より会社員）
B（男性）	24歳 日本生まれ	家庭言語 小学校で母語教室 現在NPO母語講師	大卒・小学校支援員・NPO母語講師。Cの兄
C（女性）	18歳 日本生まれ	家庭言語 小学校で母語教室	高3（2021年大学進学） Bの妹

継承語学習動機 の低下と高揚

2020～21年のインタビュー



7

継承語学習動機の低下と高揚

- 低下期：小学校4年生～中学生
(北山：2012、落合：2012)
- 高揚期：高校卒業～大学 進路選択期
(中川：2011、落合・上原：2022)

8

マイナス発言例

- ベトナムを意識するときは必ず羞恥心を感じていた。ベトナムってワード出た時点何にしろなんかベトナムを連想させるものはすごい羞恥心も入ってたんで
- 周りもやっぱベトナム人であることを否定されるわけなんですよ。周りは基本的に日本の方が多い。（中略）当時はそのクラスメイトがやっぱ否定を入れてくる。（B）

9

マイナス発言例

- 何でこれわからないの？これ知ってほしい。知ってくれたら嬉しいっていうポジティブな言葉でもやっぱ要求値が高い。両親は完璧なベトナム語話者、（中略）なんで自分らのレベルにならないんだっていう、これぐらい普通だろうっていう基準はやっぱあってそこをやっぱ度々伝えてくる。（B）

10

継承語不安

Heritage
Language
Anxiety

(Sevinç & Backus, 2017)
日本とベトナムの間で
モノリンガル・モノカルチュラルな社会
日本語（ベトナム語）が絶対的な権威性を持つ学校
と家庭

11

- 「大学の4年生の時にようやく、ベトナムにいる家族に会いたいと思って12年ぶりにベトナムに帰ろうと思った。そのきっかけは、大学の実習で台湾に行き、そこで自分の国はどうなんだろう、発展してるのかな。って考えて親戚にも会いたいし行ってみようと思った。（ベトナムで）実際に親戚に会って優しく受け入れてくれた。それをきっかけにベトナム語の教科書で勉強を再開した（B）（フィールドノートより）」

プラスへの転換

12

マイナスからプラスへの転換のきっかけ

- 大学の級友・就職活動での採用担当者からベトナムルーツへの肯定的な評価
- SNSでのベトナム留学生・本国の親戚とつながる
- 大学の研修旅行で台湾に行き、台湾がこんなに進んでいるならベトナムはどうなっているのかと気になり里帰りを決意

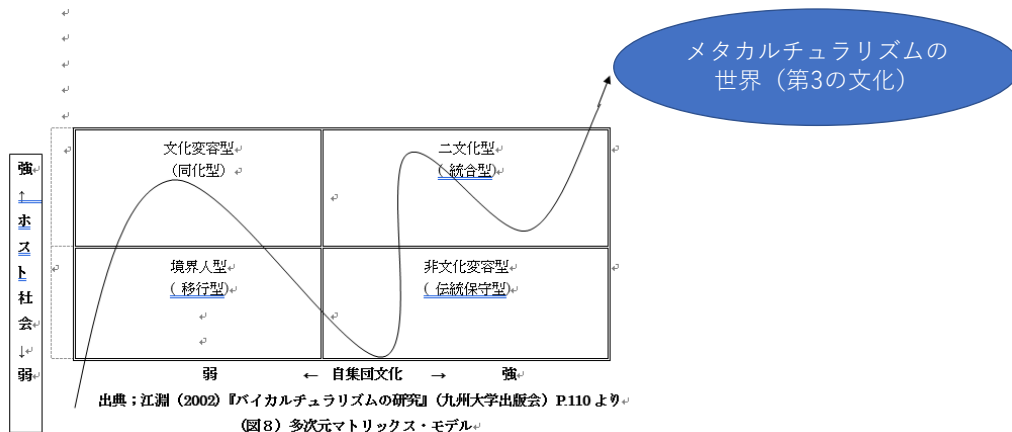
13

否定から肯定へのエピファニー
家庭と学校以外に世界が広がり始める



- 大学生以降ベトナム・アイデンティティを肯定し、ベトナム語の勉強を自主的に再開

14



Berry（1980）、Keefe&Padilla（1987）ホスト社会への適応・受容の強弱、母文化への愛着の強弱の2つの座標軸が作り出す4つの象限の間を揺れながら二文化化、さらには第3の文化を身につけた人間へと移行していく「多次元マトリックス・モデル」江淵（2002）

15

引用文献

- Berry J.W. (1980) "Acculturation as Varieties of Adaptation" in Padilla (ed.) *Acculturation: Theory, Models and Some New Findings*, Boulder, CO: Westview., pp.9-26.
- 江淵一公（2002）『バイカルチュラリズムの研究 - 異文化適応の比較民族誌』九州大学出版会.
- Keefe, Suzan E. & Padilla, Amado M. (1987) *Chicano Ethnicity* University of New Mexico Press.
- 川喜多二郎（1996）『川喜多二郎著作集5K]法一混沌をして語らしめる一』中央公論社.
- 川喜多二郎（1967）『発想法』中公新書.
- 北山夏季（2012）「公立学校におけるベトナム語母語教室設置の意義について一保護者の取り組みと児童への影響」『人間環境学研究』10(1) pp.17-24
- 神戸市（2024）「外国人の人口」<https://www.city.kobe.lg.jp/a47946/shise/toke/toukei/jinkou/kokusekibetsu.html>（2024.11.07 on-site）
- 神戸市海外ビジネスセンター（2022）「日本の在留外国人数」<https://www.kobe-obc.lg.jp/gaikokujin/status/>（2024.11.07 on-site）
- 中川康弘（2018）「継承語教育において「共通語」と「変種」はどう位置付けられるか：同一言語内の異なりを相補関係とする理論の形成に向けて」『中央大学論集』第39号，29-39
- 難民事業本部（2005）「インドシナ難民の発生と日本の対応」<https://www.rhq.gr.jp/outline/p01/>（2024.11.07 on-site）
- 落合知子（2012）『外国人市民がもたらす異文化間テラシー』現代人文社
- 落合知子・上原夏海（2022）「母語を育む教育環境についての研究：ベトナムルーツの青少年のインタビュー解析から」『教育学論集』25, 11-21.
- Sevinc, Y., & Backus, A. (2017). Anxiety, language use and linguistic competence in an immigrant context: a vicious circle? *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*, 22(6), 706-724.

16

ベトナム難民2世の定着をめぐって —教育と介護の視点から— 介護編

野上 恵美
武庫川女子大学
eminogami@yahoo.co.jp

本報告の背景

- 七山(2010)、瀧尻ら(2007)によると、
 - ・日本語能力の不足
 - ・脆弱な経済基盤
 - ・希薄な地域交流
 - ・難民経験に伴う喪失感情に起因するメンタルヘルスの不調
- ➡ベトナム系高齢者の「脆弱さ」「孤立」に着目し、
支援体制の構築を提言

本報告の背景

- 愛知県「外国人高齢者に関する実態調査報告書～ともに老い、ともに幸せな老後を暮らすために～」
<https://www.pref.aichi.jp/soshiki/tabunka/gaikokujinkoureisya-chousa.html>

前掲の報告書に挙げられている課題

- 書類の多言語化や、依頼に応じて通訳を派遣できるシステムの構築が必要
- 母語ができるケアマネジャーの養成や、在住外国人が資格を取りやすい仕組みが必要
- 外国人高齢者が周囲に遠慮することなく、母語や母国文化を享受しながら日々の生活を送ることができる居場所づくりが重要
- 分野の異なる多様な主体が連携して、外国人高齢者に対する介護ネットワークを形成して解決ができるような仕組みが必要

本報告の方向性

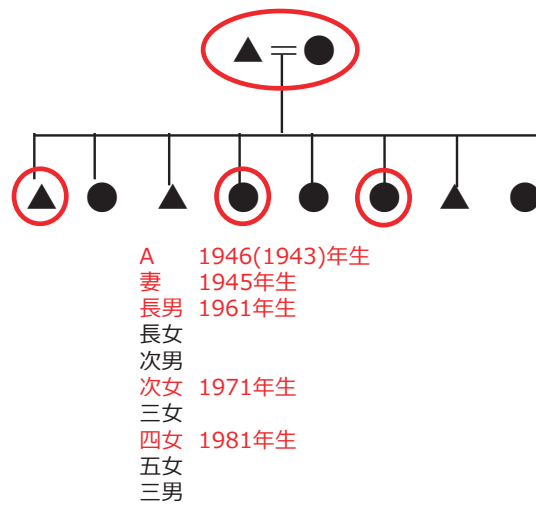
- 神戸大学保健学研究科 山口裕子氏「在留外国人への在宅医療・介護サービス提供時に訪問看護師が抱える困難と対応」に大きな示唆を受ける
- ベトナム系高齢者が望むケアを考える際、「在宅医療・介護サービス」という視点が重要になってくるのではないかな？

ベトナムのケア規範

- ERIALレポート2018(ベトナムにおける高齢化と健康に関する縦断的研究)
 - ・息子、娘に老後の面倒をみてほしいと強く願っている
 - ・息子、娘も親の面倒は自分たちがみるものと思っている
- 施設は、寡婦／夫、未婚者など身寄りのない高齢者が利用する場所というイメージ

* 自宅に他人を招き入れることに対して、日本人よりも抵抗感が低い

事例家族について



プライバシー保護の観点から本報告に関わらない人物の生年は省略した。

事例家族にみられる老親との関わり方

- 両親の近くに住んでいるきょうだいの中で、日本語とベトナム語が話せる次女と四女が病院へ同行(同行できない時はタクシーで通院)
- 四女の孫は毎週末、祖父母宅へ泊りに行く
- 長男は「親が寂しいだろうから」という理由で、実家に食事を食べるにやってくる

ベトナム人在宅ヘルパーの参入

- 介護タクシーを使えるように介護認定を行う
- 日常生活を送ることが困難になってきたので、ベトナム人ヘルパーに来てもらう

ベトナム系高齢者にとって望ましいケアとは

- 家族とベトナム人ヘルパーによるケア(言葉の問題がクリアできる、ベトナム料理の提供)➡本人と家族も望ましい状態
 - 高齢者が「親」としての役割を発揮できるような機会の維持
- ➡2世が日本の社会資源を活用することにより、ベトナム系高齢者は望ましいケアを享受することができる

参照文献・資料

- 岩井美佐紀、野上恵美、土屋敦子「ベトナムにおける高齢者とケア—ERIALレポートレビューを中心に—」『グローバルコミュニケーション研究』第11号、神田外国語大学グローバルコミュニケーション研究所、pp.211-235、2022年
- 愛知県『外国人高齢者に関する実態調査報告書～ともに老い、ともに幸せな老後を暮らすために～』
<https://www.pref.aichi.jp/soshiki/tabunka/gaikokujinkoureisya-chousa.html>、2021年
- 瀧尻明子『在日ベトナム人高齢者の保健福祉ニーズと保健福祉従事者の意識に関する研究』(科学研究費補助金研究成果報告書)、2007年
- 七山智恵子「在日ベトナム人高齢者の福祉の在り方」、『上智社会福祉専門学校紀要』Vol. 5、pp. 57-69、2010年

2024年11月24日（日）「越境・生活世界～インドシナ難民からミャンマー難民までの50年」

ラオス難民定住の軌跡 —葛藤と楽観性の狭間で

The Process of Lao Refugee Settlement:
Between Conflict and Hope

乾 美紀

Inui@shse.u-hyogo.ac.jp

（兵庫県立大学）

自己紹介と専門分野



◆大学卒業後、日本語教師として渡米。

→ラオスからの難民生徒（Hmong）に出会う

◆Hmong難民の出身国（ラオス）で少数民族と教育格差の研究を進めてきた

専門：比較教育学
多文化共生教育



本日の講演の目的



3

- 講師： 兵庫県に住むインドシナ定住難民とこれまで約30年近くにわたって関わってきた

・ラオス難民が日本(主に兵庫県)で定住してから、どのように葛藤を抱き、どのように問題を乗り越えてきたかについて報告する
(特に発表者が受けた相談事項から分析)



人数が少ないという特徴を持つラオス難民が
どのように日本社会を超えて生きているか？

講師とラオス定住難民との関わり

4

ラオス定住難民とのかかわり(ボランティア)

- 1997年に米国から帰国後、姫路近辺のコミュニティ訪問者・個人相談ボランティア(進路・生活相談、帰化書類の準備など)
- ラオス研究を進めながら姫路近辺の定住者たちに関わる
- 神奈川県・兵庫県の定住難民にインタビューを実施

日本とアメリカでの難民の
受け入れの違いに衝撃を受けた

日本のインドシナ難民受け入れ

5

1979

・難民事業本部設置

1979~

- ・ 姫路定住促進センター(1979~1996)
- ・ 大和定住促進センター(1980~1998)

1982
1983

- ・ 大村一時レセプションセンター
- ・ 国際救援センター

本発表：特に兵庫県姫路市について焦点を当てる

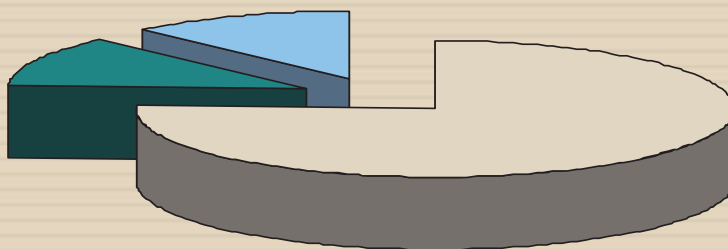
インドシナ難民の定住状況

6

- ベトナム 8,565
- **ラオス** 1,306
- カンボジア 1,357

日本国内＝
約11,100人

ラオス人、ベトナム人は
定住者が少ない



- ベトナム
- ラオス
- カンボジア

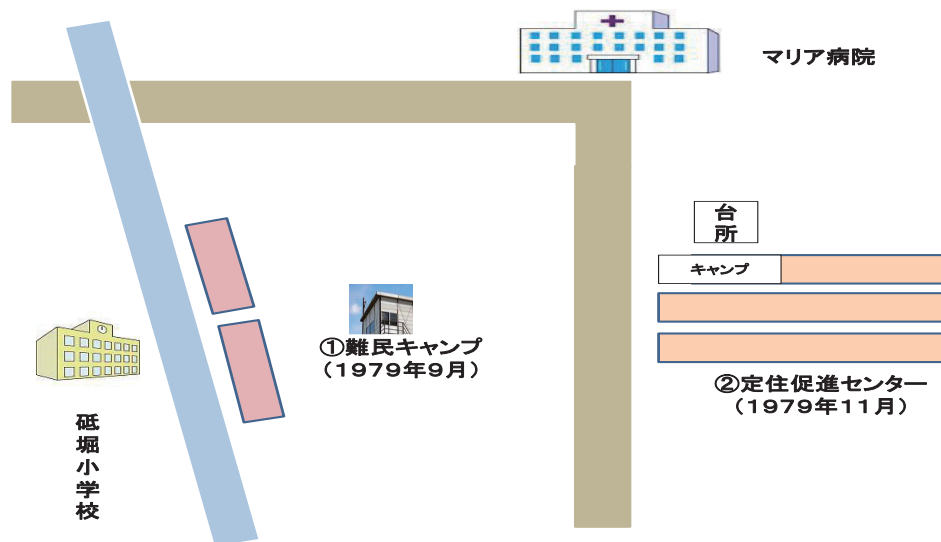
出典：難民事業本部
<http://WWW.rhq.gr.jp/index.htm>

ラオス人定住の概略



姫路定住促進センター(1979～1996)

難民は30～40代が多く、
子どもを連れて日本に定住



* 姫路センター: ベトナム人(2,201人)、ラオス人(439人)が修了

* 大和センター: カンボジア人(1,217人)、ラオス人(857人)ベトナム人(567人)が修了

ラオス人定住の概略

主な定住地域 (姫路市以北に定住傾向)



ラオス人定住者数＝約90名 (岡山県、広島県にも数世帯) 分散傾向にある

定住初期：～1990年代後半

分離期

9

1998年頃



日本人
とは疎遠

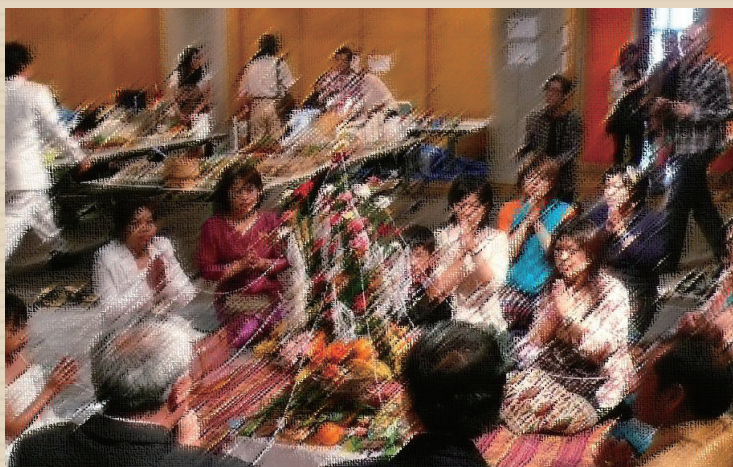


Lao Unity House

- ・ラオスに属す(国民統合)考え
- ・難民コミュニティ内で結束し、文化を維持、
- ・相談事(就労、収入)

定住中期(2000～2010年頃)

葛藤期



日本社会で生きることを決意。集会場所を模索
相談事：1. 5世 ⇒教育継続の意思(学業不振)、犯罪
1世 ⇒帰国か帰化か

1. 5世が直面した現実

葛藤期

11

高校に進学できない1.5世が続出。
学業の継続を諦めて工場で働く

調査対象からの回答 (2005)

来日時(1990年代)、特別な教育を受けなかった
「難民やったけど、特別な扱いはしてもらえなかった」
「普通に日本人の子どもたちと同じクラスにいた」

- 関西ラオス協会「高校修了者は少ない、幼少の時に来た子どもだと、10%くらい」(2006)

学習言語が確立する前に教育から疎遠に

1.5世の教育年数の違い(兵庫・神奈川)

表 1 居住地別に見る教育年数の違い (T検定による分析) N=173

	居住地	N	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差
子弟の学歴 (教育年数)	兵庫県周辺	20	10.32	1.71728	.38400
	神奈川県周辺	20	11.56	1.73156	.38719



神奈川の方が教育年数が長い

- 1982年より支援開始、国際教室で指導。恵まれた学習環境(日本語教室157、学習補習教室31、母語教室16)
- ラオス寺院で、各種行事を開催。

定住後期(2010-2019)

統合期①

13



仏教信仰を深めつつ、日本人と共生しつつ暮らす覚悟
相談事：居場所の確立、帰化の方法に関する質問

独自の文化維持(機会の2分化)

14

①ラオス人のみの仏教儀式



②日本人も招き正月(ピーマイ)を開催



近年(コロナ以降)

統合期②

15



- ・正月の集まりに日本人、在日ラオス大使が参加
- ・葬儀：上座仏教(ラオス)、大乘仏教(日本)と融合
- 相談事：1世の高齢化、病気、一時帰国、
(教育経験に乏しい1.5世がサポートすることの困難さ)

考察① 葛藤を「楽観性」で乗り越える

16

葛藤

経済的な自立

職業された限定
教育経験不足

高齢化、帰国
文化の維持

将来への不安

楽観性

仏教
同胞ネットワーク

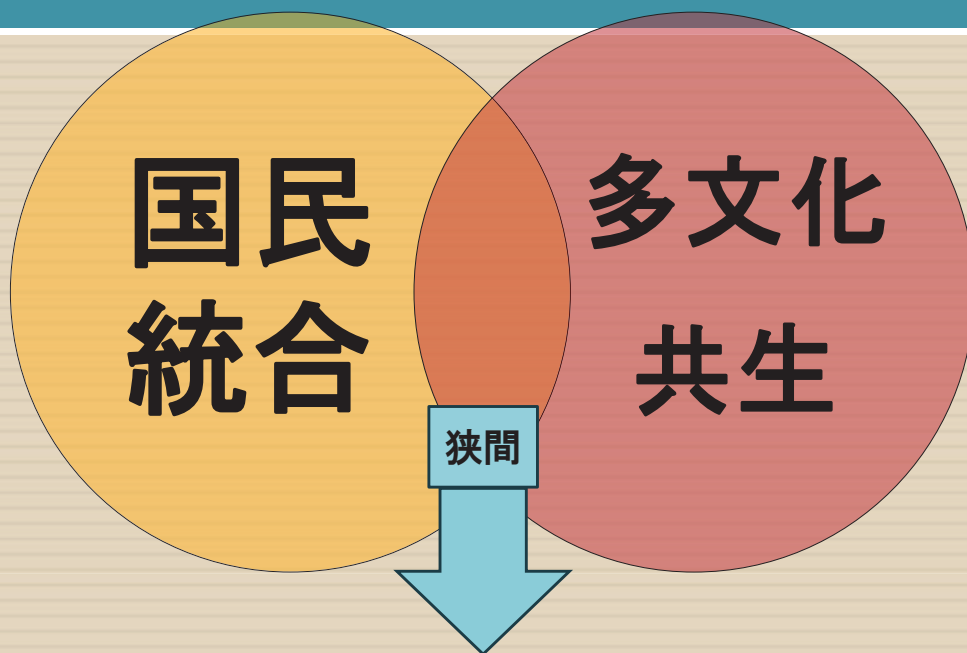
ボーペン
ニャンの
精神

支える日本人
の増加



考察②グレーな部分で生きる戦略

17



このグレーな部分こそ「居心地よさ」のポイントでは
ホスト社会：グレーな部分を受け入れる必要

引用文献

- 乾 美紀(2006)「ニューカマーと高校入試制度の現状—進学機会の拡大に向けて—」『ニューカマー児童生徒の就学・学力・進路の実態と環境改善に関する研究』報告書 研究代表者 志水宏吉
- 乾 美紀(2007)「ラオス系難民子弟の義務教育後の進路に関する研究—「文化資本」からのアプローチ—」『人間科学研究紀要』第33巻 大阪大学人間科学研究科
- 乾 美紀(2009)「進路選択の規定要因に関する研究—ラオス系難民を対象とした定量的分析の試み—」『アジア教育研究報告』第9号 京都大学大学院教育学研究科
- 乾美紀(2013)「ラオス定住難民の日本での教育経験の検証と政策提案」『難民研究ジャーナル』第3号
- 久保忠行・瀬戸徐映里奈・乾美紀(2014)「日本の難民受け入れ経験を問い直す—兵庫県姫路定住センターと難民キャンプの記憶から—」『難民研究ジャーナル』第4号
- 乾 美紀(2023)「ラオス難民—見えない難民の見えない問題を可視化することの必要性—」『保健の科学』65号 pp.37-41.
- 難民事業本部ホームページ <http://www.rhq.gr.jp/>



Where do the Victims of Nation-State Exclusion Go?

Thinking about the Refugeehood Rohingya Muslims from Burma, their Migration Trajectories, and their Arrival in Japan.

Self-Introduction: Stephen McIntyre

- Started researching Rohingya refugee-migrants in Japan in 2016 as part of a Master program at Hitotsubashi University's Graduate School of Social Sciences (Transnational Sociology).
 - Master thesis based on interviews with Rohingya refugee-migrants in Japan in 2018.
 - Two articles published based on Master thesis in 2021.
 - One of which covered the topic for today's discussion.
- Currently completing a PhD program where I have been comparing the experiences of Rohingya from Burma and Kurds from Turkey living in Japan.

Research Question

- Why did a small number of Rohingya refugees decide to come to Japan?
- How did they manage to arrive and seek asylum in Japan?
 - What prevents more Rohingya from coming to Japan?

Historical Background	
Dates and Events	Details
Arakan Kingdom 1430 to 1785	Trade and relations with Muslim empires in the bay of Bengal and migration of Muslims to Arakan.
British colonial rule in Arakan following 1 st Anglo-Burmese war 1824-26	Migration of Muslims during this time from the Chittagon into what is now northern Arakan.
WW2	Mobilization of Muslims by the British and of the Buddhists by the Japanese during WW2.
1962 Military Coup	General Ne Win takes control of country (Burmese Socialism) Increasing “Burmanization”
1978 Operation <i>Nagamin</i> (Dragon King)	300, 000 Rohingya flee across the Border with Bangladesh. Agreement reached to allow their return. Many refuse to go back as reports of violence continue.
1982 Reform to Citizenship Law	New Citizenship Law states that there are 135 “national races”. Excludes Rohingya from citizenship as a “race” or “ethnic group”.
1988 Mass Protests against military dictatorship	Resignation of Ne Win, establishment of new regime, national elections held in 1990 and NLD win with mass popular support. Aung San Suu Kyi detained and crack down on protestors.
1991 to 1992 Operation Pyi Thaya (Clean and Peaceful Country)	210,000 to 280,000 Rohingya Refugees cross the Border with Bangladesh. Joining those who had already fled in 1978. Many refuse to return.
Gradual escalation of persecution leading to mass exodus in 2017	2012 violence: many Rohingya become IDPS, 2014-15 mass exodus by boat, 2016 -2017 violence leading to increasing numbers of Rohingya refugees (more than 700,000 in 2017). 1 million refugees in Bangladesh.

Rohingya Muslims in Japan

- 330 to 350 (and increasing by birth) Rohingya Muslims living in Japan
 - Most live in Tatebayashi city in Gunma prefecture, others in Saitama, Tokyo, and Chiba prefectures.
- At the time of field work (2017) around 20 Rohingya recognized as Refugees.
 - Around 70 Rohingya given legal immigration status on special permission to reside on humanitarian grounds.
 - Around 20 Rohingya were still on irregular immigration status.
 - Since 2021 most if not all have been granted legal immigration status.

Research Theoretical Perspective and Methods

Ontology and Epistemology

Sociological Realism

Refugee Systems Approach:
Importance of historical and political context

Methodology

Textual sources: Primary and secondary

Life-Story interviews

Participants of this study

- 17 Rohingya participants (15 male 2 female)
Interview conducted in Japanese, English and using a translator (Rohingya community member in Japan)
- Approached community through introduction to prominent community member.
- Introduced to other Rohingya in Japan at social gatherings and events.

How and when they fled

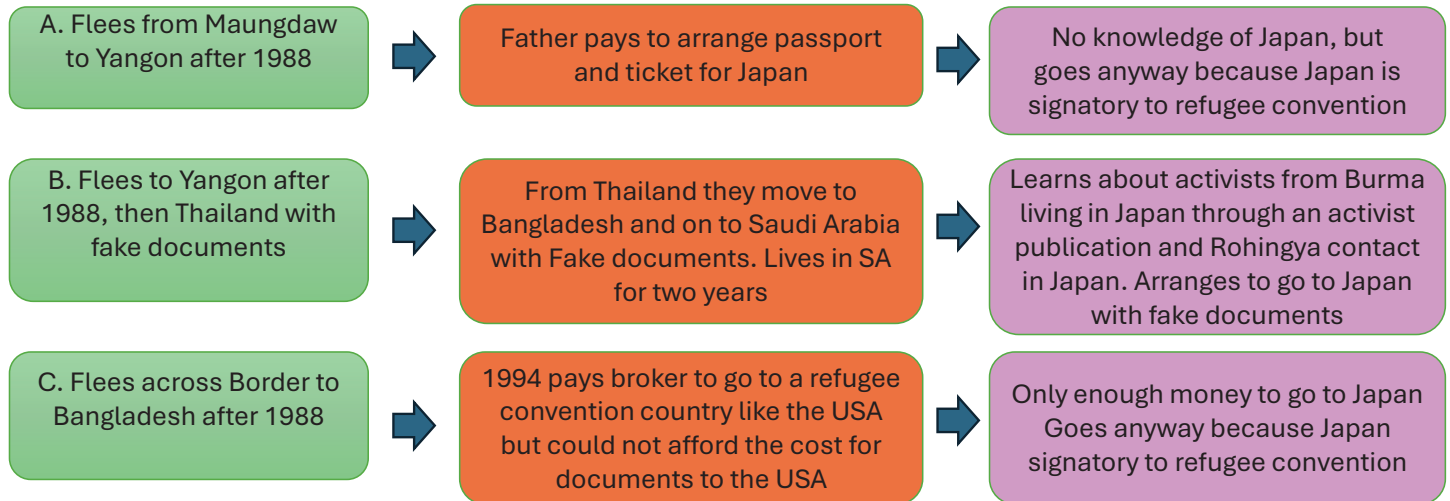
Situation \ Date	Significant historical incidents for Rohingya	Consequences for Burmese and Rohingya in general	Specific to participants of this study and Rohingya in Japan
1978 -79	Operation <i>Nagamin</i> to check documents of Muslims in Arakan. Mass violence against civilians by military	First mass exodus of Rohingya after independence from the UK Up to 300,000 refugees .	2 participants fled with families to Bangladesh returned 1 year later 1 moves internally to Yangon to join brother already living there.
1982	Changes to Burmese Citizenship Law	Rohingya Muslims not included in the 135 official "national races"	Provides the legal justification for non-issuing of ID cards to Rohingya in Arakan state
1988 - 1990	Mass student and civilian protest nation wide in Burma. Subsequent crackdown on Protesters.	"1988 generation" of Burmese protestors including Rohingya flee to Japan and other countries	4 participants flee as refugees or internally: to Yangon (IDP); to Bangladesh; Thailand; Saudi Arabia.
1991-1992	Operation Pyi Thaya (Clean and Beautiful Nation)	Operation to prevent "illegal immigration" results in mass violence with 210,000 to 280,000 Rohingya refugees flee to Bangladesh	1 Saudia Arabia to Japan (1992) 1 Yangon to Japan (1993) 1 from Bangladesh to Japan (1994). 1 from captured by military fled to Thailand then to Bangladesh.
1990s-2000s	Ongoing persecution of Rohingya. Ongoing activism for democracy and suppression of activists	Refugees reluctantly return because of UNHCR agreement. Ongoing persecution and discrimination. Taking of Rohingya land.	First Rohingya recognized as refugee in Japan (2021). 1 man comes from Malaysia to Japan, recognized as a refugee (2002). 1 man comes from Bangladesh to Japan 6 participants move to Malaysia mostly via Thailand.
2005 - 2006	Japan reforms immigration laws	making it possible for many refugees in Japan to apply for asylum	Rohingya in Malaysia use a broker to travel to Japan to seek asylum (6). Some given humanitarian visas others many years as irregular migrants
2012, 2014-15, 2016,2017	Escalation of violence "Slow burning genocide" since Genocide in 2017 Mass violence, killing, exodos	IDPs and mass exodus of Rohingya refugees Boat people crisis 2014-15 Over 700000 refugees flee to Bangladesh in 2017 - 18	Parents and siblings of participant brought to Japan in 2016. Later found to be refugees. Rohingya in Japan work to raise awareness regarding ongoing persecution of Rohingya in Burma

How they Came to Japan

- 1988 Pioneers
 - Little knowledge of or single contact in Japan
- Followers (late 1990s to 2000s)
 - Already aware of Rohingya community in Japan
 - Mostly already living for many years in another country such as Malaysia or Bangladesh
- Mechanisms for movements
 - Bribes / Brokers
 - Transnational Networks / Chain-migration
 - Navigating transition countries
 - Family Reunification

1988 Generation of Pioneer Rohingya Refugee-Migrants

Paying a Broker to travel to “wealthy receiving country”.



When asked why Japan...

- 1993 leaves for Japan with “Fake” official passport and plane ticket to Japan.

“We heard [about] Japan . . . [that you] can receive refugee [status]. [there was] no choice, [to go to] another country, so let’s go to Japan.””

(Rohingya man in his mid-sixties Interviewed in Tokyo [2017 April 21]). They had arrived in Japan directly from Burma in 1993 later granted legal immigration status on humanitarian grounds

Followers: Late 1990s to 2000s

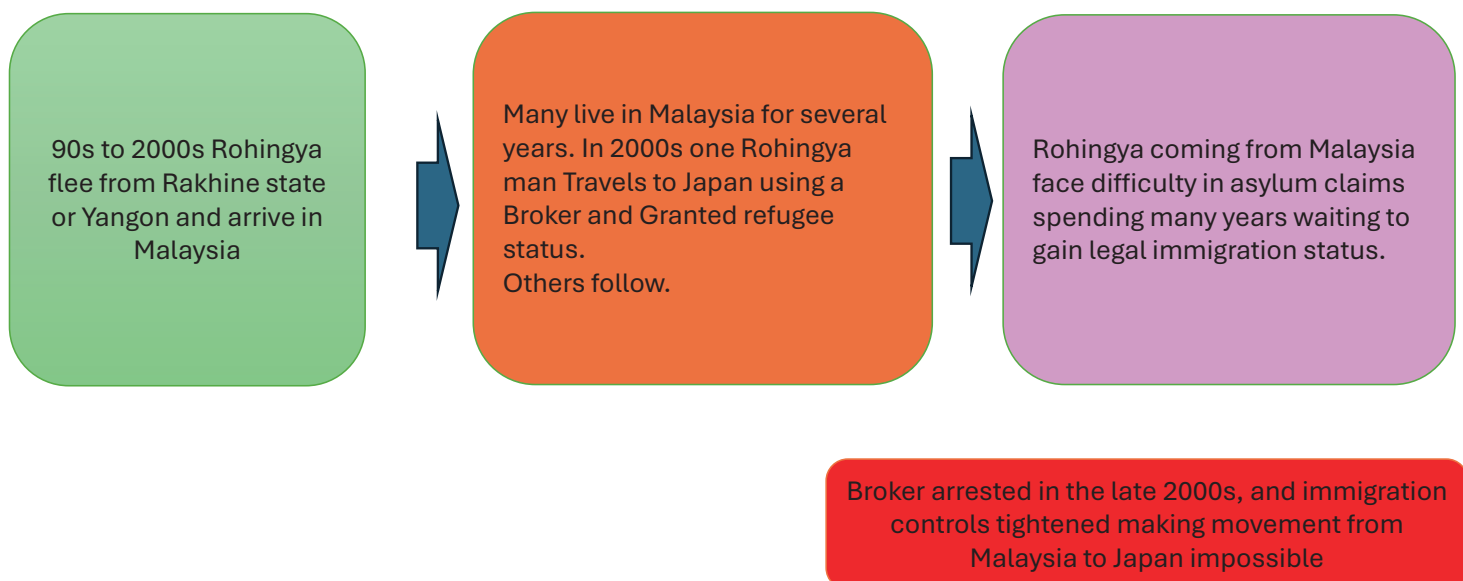
- 1988 Pioneers establish small Rohingya community organization and live close together in Japan
 - Other Rohingya refugee-migrants join them through the 1990s.
 - Some Rohingya are granted legal immigration status

- The first Rohingya is given refugee status in Japan in 2022

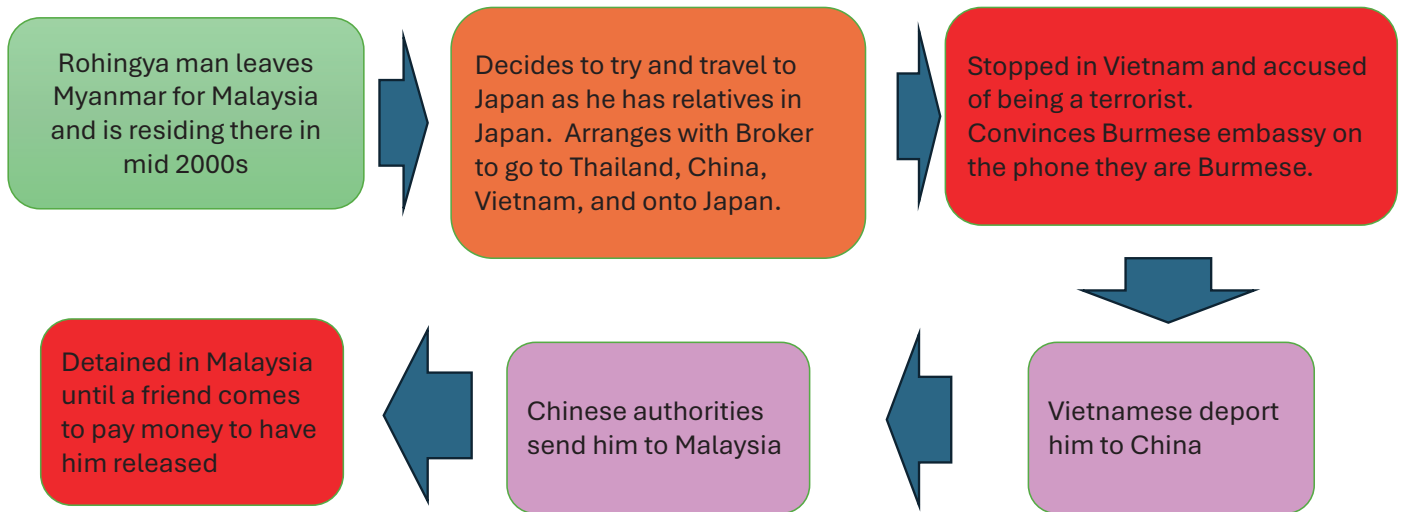
(Arakaki 2008:50)

- Rohingya living in Malaysia use a broker to come to Japan to seek asylum.

Transnational networks and chain-migration: navigating through Bangladesh, Thailand, Malaysia, and onto Japan



Unsucessful Navigation of Immigration Example of Activist in Malaysia seeking asylum in Japan



Family Reunification for Entering Japan

- Foreign-born stateless and undocumented Rohingya woman in Malaysia marries Rohingya refugee arriving in late 90s
 - Resettled in Japan together with young son after husband recognized as refugee in the early 2000s
- Rohingya man living in Japan on legal immigration status brings father, mother and sister to Japan in 2017 after they flee to Bangladesh in 2016
 - They spend several years in Japan before finally being recognized as refugees in 2021.

Formation of a Small Rohingya “Community” in Japan

- By around 2018 About 20 < Rohingya refugees have now been recognized as refugees in Japan.
 - More than 70 individuals had been given some sort of legal immigration status to live permanently in Japan.
- A small number were still waiting for their irregular immigration status to be regularized
 - Following the military coup in 2021, the Japanese government granted many people from Burma living in Japan a 1 year “designated activities” visa as part of the “Emergency Evacuation Measure “*Kinkyu hinan sochi*”
 - Rohingya who had been living without legal immigration status were also granted such visa’s allowing some to live in Japan for the first time with a visa **after over a decade with no legal immigration status**.
- The majority of Rohingya living in Japan are living around Tatebayashi city in Gunma prefecture where there is a Mosque that also acts as a center of community activity. Others live in Saitama and Tokyo prefectures.

Conclusion: Japan not the first choice but a choice among very limited options

- Pioneers refugee-migrants use brokers to come to Japan which was a hub for Burmese refugee activists in the 1990s
- Transnational networks, brokers, and family reunification allows more Rohingya to join those already in Japan
- Tightening border control mechanisms prevent any further or large-scale refugee-migration of Rohingya to Japan.
- Japan a limited choice for a small number of Rohingya refugee-migrants.

Points for consideration

- Incorporate the Refugee Systems perspective to analyzing data
- Include more recent data collected through interviews conducted with Rohingya in Japan after the publication of the articles.
- Combine the life-story interviews of the Rohingya with those conducted with Kurdish refugee-migrants in Japan.
 - The experiences are very different.
 - Most Kurdish refugee-migrants were able to arrive directly in Japan.
 - The situation faced by Kurds in Turkey is serious, and there are parallels but also differences to that faced by Rohingya in Burma.

References

- Arakaki, Osamu, 2008, *Refugee Law and Practice in Japan*, New York : Ashgate Publishing.
- Arar, Rawan, and David Scott FitzGerald. 2022. *The Refugee System: A Sociological Approach*. John Wiley & Sons.
- Bertaux, Daniel, 1981, From the Life-History Approach to the Transformation of Sociological Practice, in D. Bertaux (ed), *Biography and Society: The Life History Approach in the Social Sciences*, Beverly Hills: SAGE Publications. p. 29-45
- Bertaux-Wiame, Isabelle. 1981. The Life-History Approach to the Study of Internal Migration. in *Biography and Society: The Life History Approach in the Social Sciences*, edited by D. Bertaux. Beverly Hills: SAGE Publications.
- Cheesman, Nick (2017): How in Myanmar “National Races” Came to Surpass Citizenship and Exclude Rohingya, *Journal of Contemporary Asia*, DOI:10.1080/00472336.2017.1297476
- Iosifides, Theodoros. 2011. *Qualitative Methods in Migration Studies: A Critical Realist Perspective*. Farnham Burlington (Vt.): Ashgate.
- Leider, Jacques, 2016, “Competing Identities and the Hybridized History of the Rohingyas.” In *Metamorphosis: Studies in Social and Political Change in Myanmar*, edited by Renaud Egretteau and Francois Robinne, 151-178. Singapore: NUS Press.
- Malkki, Liisa H., 1995, Refugees and Exile: From ‘Refugee Studies’ to the National Order of Things, *Annual Review of Anthropology* 24:495–523.
- Van Hear, Nicholas. 1998. **New Diasporas : The Mass Exodus, Dispersal and Regrouping of Migrant Communities**. London: UCL Press.
- Yegar, Moshe. 2002. *Between Integration and Secession: The Muslim Communities of the Southern Philippines, Southern Thailand, and Western Burma/Myanmar*. Lanham MD: Lexington Books.
- Zolberg, Aristide R., Astri Suhrke, and Sergio Aguayo. 1989. *Escape from Violence: Conflict and the Refugee Crisis in the Developing World*. New York: Oxford University Press.
- 米川正子, 2017 『あやつられる難民』 ちくま新書

あとがき

県立広島大学 上水流久彦

本書は、2024 年 11 月 24 日（日）に神戸大学にて行った人間文化研究機構グローバル地域研究事業東ユーラシア研究プロジェクト神戸大学国際文化学研究推進インスティテュート拠点（略称 EES 神戸）の「人口減社会における越境・家族・国家」グループ（取りまとめ 上水流久彦、山形大学・今村真央、摂南大学・落合知子、武庫川女子大学・野上恵美、金沢大学・前野清太郎）が企画したシンポジウム「越境・国家・生活世界～インドシナ難民からミャンマー難民までの 50 年」の報告内容を取りまとめたものです。昨年度は、シンポジウム「日本を選ぶ（残る）理由、日本を選ばない（去る）理由」を実施し、報告書（年報 Promis Vol.2（2023））にまとめましたが、この度も神戸大学国際文化学研究推進インスティテュートのご厚意で報告書としてまとめることができました。

2025 年はインドシナ難民が生まれて 50 年目という節目の年です。そのことを意識して「人口減社会における越境・家族・国家」グループは企画しました。第一部の基調講演では、クラーク大学の Ken MacLean 教授にインドネシア難民に関する歴史や社会的課題を俯瞰的に提示してもらいました。第二部では基調講演を受けてベトナム難民、ラオス難民、ロヒンギャ難民に関する個別具体的な事例に基づく発表を行ってもらいました。それぞれに緻密かつ的確なコメントもしてもらいました。その詳しい内容は本文を見ていただきたいが、難民が様々な困難のもと日本を含む世界で国境を越えて如何に生き抜き、生活世界を拡大してきたか、改めて考えさせられるものであった。その姿は「〇〇難民」と形容することが如何に無意味であるかと思わせ、基調講演に通じるものであった。

一方で、ホスト社会詳細に論じることはできなかった。例えば、日本では多文化共生というかけ声のもと外国出身者を表面的には受け入れているが、自文化中心主義的なものは依然として強固にあるという現状がある。そこは両者の間になかなか乗り越えられない境界がある。今後はマイノリティの周囲に暮らしている日本側の人たちがどのように彼らとコミュニケーションを取っているのか、取っていないのか、彼らの存在を認識しているのか、していないのか、さらにはどのように彼らと暮らしているのかということも含めて考えていく必要がある。ホスト社会とのもつれ合いを視野にいれ、包摂と排除、国家の統制とそれへの抵抗と逸脱を「人口減社会における越境・家族・国家」グループでは検討していきたい。

最後に多忙のなか、基調講演をしてくださったクラーク大学の Ken MacLean 教授、個別報告をされた兵庫県立大学・乾美紀先生、一橋大学大学院院生・マキンタヤスティーブン・パトリック先生、武庫川女子大学・野上恵美先生、摂南大学・落合知子先生、コメンテータの山形大学・今村真央先生、神戸大学・下條尚志先生、共催いただいた県立広島大学多文化共生社会研究センターに御礼申し上げます。

報告者（登壇順）

上水流 久彦（県立広島大学 教授）

Ken McLean（クラーク大学 教授）

今村 真央（山形大学 教授）

落合 知子（摂南大学 准教授）

野上 恵美（武庫川女子大学 准教授）

乾 美紀（兵庫県立大学 教授）

マキンタヤスティーブン パトリック（一橋大学大学院 博士課程）

下條 尚志（神戸大学 准教授）

岡田 浩樹（神戸大学 教授）

年報 Promis Vol.4（2025）No.2（別冊）

発行日 2025 年 9 月 30 日

編 集

上水流 久彦（県立広島大学教授）

制 作 者

神戸大学国際文化学研究科国際文化学研究推進インスティテュート（Promis）

〒657-8501 神戸市灘区鶴甲 1-2-1

電話・FAX 078-803-7494 メール gicls-promis@research.kobe-u.ac.jp

ウェブサイト <http://promis.cla.kobe-u.ac.jp>

Printed in Japan

© Research Institute for Promoting Intercultural Studies, Kobe University 2025